

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8001

業務実績書（受託事業）

研No.6-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	比叡山延暦寺建造物の普及・啓発に関する業務（受託）（(1)－③）		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 林良彦
【スタッフ】 海野聡(遺構研究室研究員)			
【年度実績概要】 平成 23、24 年度に当研究所が行った比叡山延暦寺建造物総合調査事業の成果を受け、さらに一般向けに文化財の普及啓発を行うためにかみ砕いた内容で出版物を刊行するための原稿を作成した。 所有者の行う文化財の普及啓発事業に対し大きく貢献できる。			
延暦寺大書院			
【実績値】 報告書原稿 64 ページ。			
【受託経費】 283 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8002

業務実績書（受託事業）

研No.6-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	兵庫県近代和風建築総合調査（受託）（(1)－③）		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 林良彦
【スタッフ】 鈴木智大(建造物研究室研究員)、箱崎和久(遺構研究室長)、黒坂貴裕(都城発掘調査部主任研究員)、大林潤(遺構研究室研究員)、番 光(遺構研究室研究員)、海野聡(遺構研究室研究員)、松下迪生(遺構研究室アソシエイトフェロー)、中島義晴(文化遺産部主任研究員)			
【年度実績概要】 3ヵ年継続の最終年度となる本受託事業では、兵庫県内に所在する明治から昭和初期にかけて建設された文化財的価値を有する近代和風建築のうち、本年度は兵庫県文化財課が行った一次調査の結果から選定された17件の物件について、その歴史調査、実測調査、技法調査、写真撮影を実施し、配置図及び平面図の作成と文化財としての学術評価を行った。また、前年度以前からの調査を含む7件について庭園史的観点から補足調査を実施した。調査成果は学術評価原稿、配置図及び平面図、写真について、また、本年度は最終年度となることから建築類型別、地域別の総論原稿を提出した。 調査では、兵庫県内の各市町村から1件以上を条件として、各市町村に所在する近代和風建築を現地調査した。建築類型の上では、公共建築として学校、博物館を、住宅建築として町家、農家、邸宅、別荘を、宗教建築として寺院、神社を、商業建築として旅館、料亭をと、多岐にわたる対象を調査した。 調査の結果として、これまで不明瞭であった兵庫県における近代和風建築の現存状況と、建築類型の広がり幅が明らかになったこと、近代和風建築の技術の具体相が明らかとなったこと、近代和風建築に関わった施主、設計者、施工者の具体名が多数明らかとなり、近代兵庫における建築事情が解明されつつあることがあげられる。本調査は、文化庁が行っている全国の近代和風建築調査の一環として実施しているものであり、兵庫県に留まらず、日本全体における近代和風建築の研究と保存に対して多大な貢献をなす成果を上げ得るものと考えている。			
			
一乗寺常行堂（加西市） 明治10年の寺院建築			
【実績値】 調査票20枚、実測野帳50点、デジタル写真3800点、報告書原稿90ページ。			
【受託経費】 461千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8003

業務実績書(受託事業)

研No.6-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査および研究の推進		
【事業名称】	平成25年度平出地区伝統的建造物群保存対策調査(受託)((1)－③)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室 林良彦
【スタッフ】 松下迪生(遺構研究室アソシエイトフェロー)、黒坂貴裕(都城発掘調査部主任研究員)、箱崎和久(遺構研究室長)、大林潤(遺構研究室研究員)、番 光(遺構研究室研究員)、海野聡(遺構研究室研究員)、成田聖(前学芸室任期付研究員)、恵谷浩子(景観研究室研究員)、菊池淑人(景観研究室アソシエイトフェロー)			
【年度実績概要】 前年度から2ヵ年で実施する本受託事業では、長野県塩尻市宗賀にある平出集落の伝統的な建物群について、今後の保存と活用の基礎となる調査及びその報告書作成を目的とする。 調査は、集落の歴史・集落構造・伝統的建造物について対象としている。また、市内の伝統的な集落において類例調査も行っている。 今年度は、平出地区で1棟、類例として4棟の建物詳細調査(実測・聞き取り・写真撮影)及び祭礼の民俗調査を行った。5棟分の平面図作成を済ませ、原稿を整えて報告書を刊行した。 この集落及び周辺地域の民家は、規模の大きな切妻屋根で本棟造りと呼ばれる。また、山裾に湧く泉から水路を延ばし、水の利用が暮らしに根付く点はこの地域の集落の特徴である。平出集落は、本棟造り民家と水路の良好な残存状況を示し、地域の代表的な伝統的集落と評価することができる。本事業は、伝統的な集落と建造物の文化財としての価値を明らかにし、保存管理に向けた計画立案に資することができると考えられる。			
			
平出集落の本棟造り民家			
【実績値】 『平出 伝統的建造物群保存対策調査報告』2014.3 調査票16枚、実測図18枚(平面図13枚、配置図5枚)、デジタル写真2100点、大判写真22点			
【受託経費】 2,500千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8004

業務実績書(受託事業)

研No.6-4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	長谷川家建造物・庭園現況調査(受託)((1)－③)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 林良彦
【スタッフ】 番 光(遺構研究室研究員)、箱崎和久(遺構研究室長)、黒坂貴裕(都城発掘調査部主任研究員)、大林潤(遺構研究室研究員)、海野聡(遺構研究室研究員)、中島義晴(文化遺産部主任研究員)、成田聖(前学芸室任期付研究員)、鎌倉綾(写真室技能補佐員)			
【年度実績概要】 本受託事業では、松阪市魚町・殿町に所在する長谷川家住宅の建造物及び庭園の調査を行った。松阪市に寄贈された長谷川家住宅の歴史的価値を裏付ける学術的根拠をまとめ、歴史的建造物としての保存・活用計画を作成するための基礎的資料とすることを目的とする。 長谷川家住宅の建造物及び庭園について、技法調査、痕跡調査、破損調査などの詳細調査を実施し、調書の作成及び写真撮影を行った。また、長谷川家周辺に残存する町屋の外観調査を行った。その結果、調査成果を報告書として刊行した。 調査の結果、主屋が少なくとも3度の増築を行っていることが増築部の棟札や痕跡調査などから明らかになった。土蔵5棟のうち4棟の年代(最古のものは大蔵の享保6年)が棟札や墨書から明らかになった。また、殿町の明治期離れ、魚町の大正座敷など、近代の屋敷地の変遷もおおよそ明らかになった。これまで長谷川家住宅に関する調査・報告は今までなく、その歴史的価値を明らかにした調査・研究として評価できる。			
			
長谷川家住宅主屋魚町通り側外観			
【実績値】 『旧長谷川家住宅調査報告書』2014, 3 調査票 13 枚、調査野帳 20 枚、デジタル写真 2430 点、大判写真 31 点、高精度デジタル写真 35 点。			
【受託経費】 1,903 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8005

業務実績書(受託事業)

研No.14-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	興福寺西室跡の発掘調査 ((1)－⑥－ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 小池伸彦(考古第一研究室長)、渡邊晃宏(史料研究室長)、神野 恵(都城発掘調査部主任研究員)、川畑 純・石田由紀子(考古第三研究室研究員)、番 光・前川 歩(遺構研究室研究員)、芝 康次郎(考古第一研究室研究員)、松下迪生(遺構研究室アソシエイトフェロー)、中村一郎(写真室主任)、鎌倉 綾(写真室技能補佐員)			
【年度実績概要】 興福寺では「興福寺境内整備基本構想」(平成10年)に基づいて、寺観の復元・整備を進めている。本調査もその一環として、西室及びそれに付随する小子房の解明を目的として行った。調査面積は985㎡、調査期間は25年6月3日～10月11日。			
・基本層序 上から黒褐色砂質土(表土)、暗褐色砂質土(包含層)、礫混じり黄褐色シルト(地山)。遺構検出は地山上面で行った。調査前の地表に露出している礎石もあった。 ・主な検出遺構 南北棟礎石建物(西室)1棟:それに伴う礎石及び礎石の据付穴・抜取穴、基壇外装、雨落溝等を検出した。調査区内では桁行7間、梁行3間分を検出し、柱間寸法は、桁行の南端2間が約4.75m、以北が約6.65m等間、梁行は約2.95m等間。礎石のうち8石は創建当初の位置を保つ。柱間を3等分する位置に間柱の礎石痕跡がある。 南北棟掘立柱建物1棟:柱穴掘方、抜取穴。桁行7間以上、梁行2間で、西室から約2.5m隔てた位置に建つ。西室と梁行方向の柱筋を揃えるため、柱間寸法は、桁行方向は西室と同寸で、梁行は約2.6m等間である。 ・主な出土遺物 奈良時代から近代までの土器・陶磁器類及び瓦が多数出土した。土器のうち最も出土量が多いのは鎌倉～江戸時代の「カワラケ」と呼ばれる土師器の小皿。瓦は各時代の軒丸瓦・軒平瓦以外に、鬼瓦や磚、土管が出土した。 ・調査所見 西室は今回の調査成果とともに、地表に残る礎石などから全体で桁行10間、梁行4間に復元される。南北棟掘立柱建物は、創建は古代に遡るとみられ、廃絶時期は明確でないが下限は室町時代である。性格は明確でないが、小子房の可能性はある。 興福寺西室の礎石と基壇の一部を検出し、創建当初の建物や基壇に関する資料を得た。また、西室の7度にわたる再建の際には創建当初の位置と規模を踏襲していることが明らかになった。掘立柱建物はやや西室に接近しすぎており、性格については検討の余地がある。いずれにしても、興福寺の古代の寺観を考えるうえで重要な成果を得ることができた。			
【実績値】 論文等数:2件 ①番 光「興福寺西室の調査(平城516次)」『奈文研ニュースNo.51』奈良文化財研究所、2013.12 ②番 光ほか「興福寺西室の調査 一第516次」『奈良文化財研究所紀要2014』奈良文化財研究所、2014.6(予定) 報道発表件数:2件 記者発表;平成25年9月26日。現地見学会;平成25年9月28日。 記者発表;平成25年11月27日。			
(参考値) 出土遺物:金属製品・石製品等245点。土器・土製品 コンテナ47箱。 軒丸瓦187点、軒平瓦96点、丸瓦・平瓦 コンテナ56箱。 記録作成数:実測図42枚(A2判)、遺構写真82枚(4×5)、(中判デジタル)18枚、(35mm デジタル)2052枚。 遺跡航空写真(トラッククレーン)測量 垂直写真1式・測量成果品1式			
【受託経費】 21,095千円			



調査区全景(北から)

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8006

業務実績書(受託事業)

研No.14-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	法華寺旧境内の発掘調査(受託) ((1)ー⑥ーア)		
【担当部課】	都城発掘調査部 (平城)	【事業責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 渡辺丈彦 (都城発掘調査部主任研究員)、青木 敬・大澤正吾 (考古第二研究室研究員)、山本祥隆 (史料研究室研究員)、海野 聡 (遺構研究室研究員)、中村一郎 (写真室主任)			
【年度実績概要】 賃貸住宅建設に伴う事前調査。調査面積は 30 m ² 、調査期間は 26 年 3 月 6 日～3 月 18 日。			
・基本層序 表土の下、GL-0.1m付近で造成土 (厚さ 0.2m前後) を確認した。 さらに GL-0.3m付近で畑の旧耕作土 (厚さ 0.1m前後) 、GL-0.4 m前後で地山である黄褐色粘質土の順である。			
・検出遺構 検出遺構は、堀 1 列、南北溝 2 条、柱穴 1 基、土坑 1 基、ピット群などからなる。このうち西側の南北溝は、東二坊坊間路東側溝と推定される素掘溝であり、長さ 10m、幅 0.2～0.6m分を検出した。溝の西肩を調査区東端で検出し、深さは 0.4m以上と推定できる。今回の調査では、溝西肩部の確認にとどまり、西側へ向けて傾斜していることから、溝底は調査区外東側に位置し、さらに深くなると考えられる。このほか、中世以降と考えられる掘立柱堀や小穴群、土坑などを検出した。			
・出土遺物 古代～中世の土器や瓦などが、東二坊坊間路東側溝を中心に出土した。			
・調査成果 平城京左京東二坊坊間路東側溝を検出した。出土遺物から、奈良時代から中世に至るまでの長期間利用されていたことが明らかとなった。			
調査区全景 (北から)			
【実績値】 (参考値) 論文数：1 件出土遺物：丸瓦・平瓦整理用コンテナ 5 箱、土器・土製品整理用コンテナ 1 箱。 記録作成数：実測図 3 枚 (A2 判)、遺構写真 1 枚 (4×5)。 ・青木敬ほか「法華寺旧境内の調査―第 526 次」『奈良文化財研究所紀要 2015』2015.6 (予定)			
【受託経費】 531 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8007

業務実績書(受託事業)

研No.14-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	海龍王寺旧境内の発掘調査(受託) ((1)－⑥－ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 渡辺丈彦(都城発掘調査部主任研究員)、青木 敬・大澤正吾(考古第二研究室研究員)、山本祥隆(史料研究室研究員)・海野 聡(遺構研究室研究員)、中村一郎(写真室主任)			
【年度実績概要】 写経道場建設に伴う事前調査。調査地は海龍王寺境内西側、西金堂の北西である。調査面積は 30 m²、調査期間は 26 年 2 月 19 日～28 日。 ・基本層序 GL-0.4m 付近で旧耕土を確認した。その下に整地層 1(厚さ 10 cm)、整地層 2(厚さ 40 cm)と 2 層の整地層、さらに黄澄粘質土(地山)と続く。整地層 1 は、GL-0.5m(H=68.4m)、整地層 2 は、GL-0.6m(H=68.3m)で確認した。いずれの整地層にも古代～中世の瓦などが混入していることから、整地はともに中世以降と考えられる。 ・検出遺構 整地以前、すなわち古代の遺構として、海龍王寺西回廊に伴うと考えられる凝灰岩製基壇外装ならびに雨落溝の残欠を検出した。後世の削平により基壇土は残存しないなど残存状態が悪く、正確な規模と構造は不明だが、基壇外装は地覆石をもたず、幅 40～50 cm 前後、厚さ 20 cm 前後の羽目石を直接据え付けたとみられる。基壇外装据付穴の西側では、乱石積雨落溝にともなう玉石の抜取痕跡を検出した。このほか、中世以降の所産と推定される東西棟建物 1 棟、柱穴 2 基、土坑 2 基、ピット 5 基を検出した。 ・出土遺物 上記土坑を中心に、土師器や須恵器などの土器片が整理用コンテナ 1 箱分、軒丸瓦や軒平瓦をはじめとした古代～中世の瓦片が整理用コンテナ 52 箱分出土した。 ・調査成果 古代にさかのぼる海龍王寺西回廊にかかわる基壇外装や雨落溝などを検出した。既往の調査による回廊の推定復元成果も勘案し、海龍王寺の回廊規模がほぼ確定できた。このほか、中世以降における海龍王寺の土地利用の一端があきらかになった。			
【実績値】 論文等数：1 件 (①) ①青木 敬ほか「海龍王寺旧境内の調査―第 525 次」『奈良文化財研究所紀要 2015』2014.6 (予定) (参考値) 出土遺物：軒丸瓦 8 点、軒平瓦 4 点、丸瓦・平瓦整理用コンテナ 52 箱、土器・土製品整理用コンテナ 1 箱。 記録作成数：実測図 5 枚 (A2 判)、遺構写真 3 枚 (4×5)。			
【受託経費】 320 千円			



調査区全景(西から)

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8008

業務実績書(受託事業)

研№15-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	西大寺旧境内（薬師金堂西方）の発掘調査(受託)（(1)－⑥－ア）		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 渡邊晃宏（史料研究室長）、諫早直人（考古第一研究室研究員）、小田裕樹（考古第二研究室研究員）、鈴木智大（建造物研究室研究員）、中村一郎（写真室主任）、栗山雅夫（写真室技術職員）			
【年度実績概要】 共同住宅新築に伴う事前の発掘調査。調査期間は 25 年 2 月 12 日～4 月 5 日。調査面積は 190.5 m ² 。 ・基本層序 上から現代の造成盛土（約 80 cm 厚）、旧耕土（約 20 cm 厚）、床土（約 30 cm 厚）、西大寺造営に伴う整地土（約 20 cm 厚）、西大寺造営以前の整地土（約 40 cm 厚）、地山の順。 ・主な検出遺構 西大寺金堂院に関連する遺構 南北素掘溝 1 条（薬師金堂院西面回廊東雨落溝） 南北石敷溝 1 条（薬師金堂院西面回廊西雨落溝延長部暗渠か） 東西素掘溝 2 条（薬師金堂西軒廊の南北雨落溝） 瓦敷き面 西大寺金堂院創建以前の遺構 掘立柱穴 6 基 樹皮敷き面 西大寺金堂院廃絶以後の遺構 南北溝 1 条 井戸 1 基 ・主な出土遺物 南北素掘溝や 2 条の東西素掘溝からは、西大寺創建瓦を含む瓦片が多数出土した。また西大寺創建以前の柱穴抜取穴の一つから木屑や木端、瓦、土器などが大量に出土した。金堂院廃絶以後に設けられた井戸からは、西大寺創建瓦をはじめとする瓦片や、曲物などの木製品、土器・青磁片などが大量に出土した。 ・調査所見 調査区は西大寺薬師金堂跡の西方約 10m に位置する。今回確認した 2 条の東西素掘溝は、埋土に西大寺創建瓦をはじめとする多量の瓦を含むこと、既調査で検出した薬師金堂の梁行規模と両溝間の距離がおおむね一致することから、薬師金堂の西に取りつく軒廊の南・北雨落溝とみられる。北側の東西素掘溝は調査区の西部で南北素掘溝と南北石敷溝の接点に T 字状に接続する。南北素掘溝はやはり埋土に西大寺創建瓦をはじめとする多量の瓦を含んでおり、金堂院西面回廊の東雨落溝とみられ、南流する南北石敷溝については軒廊を横断する暗渠状の施設とみられる。残念ながら基壇についての情報はほとんど得られなかったものの、薬師金堂に取りつく軒廊が、従来想定されていた単廊ではなく複廊であること、西面回廊の位置が確定したことは、これまで『西大寺資財流記帳』などの文献から類推するほかなかった西大寺中軸伽藍の実態に迫る上で極めて高い学術的意義をもつ。			
【実績値】 論文等数：1 件（①）。 ①諫早直人ほか「西大寺旧境内（薬師金堂西方）の調査 一第 505 次」『奈良文化財研究所紀要 2014』奈良文化財研究所、2014.6（予定） (参考値) 出土遺物：土器コンテナ 8 箱、軒丸瓦 16 点、軒平瓦 12 点、丸瓦・平瓦コンテナ 265 箱、凝灰岩礫片コンテナ 1 箱、貨幣（元符通寶）1 点、木製品（金箔貼半円棒 1 本、部材片 3 点、杓子 1 点、削片バット 5 箱） 記録作成数：実測図（A2 判）11 枚、遺構写真（4×5）22 枚			
【受託経費】 3,343 千円			



遺構検出状況（西から）

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8009

業務実績書(受託事業)

研No.15-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	薬師寺十字廊跡の発掘調査(受託) ((1)－⑥－ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 箱崎和久(遺構研究室長)、馬場 基(都城発掘調査部主任研究員)、庄田慎矢(考古第一研究室研究員)、小田裕樹(考古第二研究室研究員)、脇谷草一郎(考保存修復研究室研究員)、星野安治(年代学研究室研究員)、児島大輔(年代学研究室アソシエイトフェロー)、中村一郎(写真室主任)、栗山雅夫(写真室技術職員)・鎌倉 綾(写真室技能補佐員)			
【年度実績概要】 薬師寺旧境内の整備に伴う十字廊跡の調査。『薬師寺縁起』に記される十字廊は、類例が国内外にも乏しい建造物であり、その規模や構造、機能、存続時期を明らかにする目的で発掘調査を行った。調査面積は859㎡、調査期間は25年9月17日～26年2月28日。 - 基本層序 調査区の東西で大きく異なる。近現代の耕作により上部を削平された東半部では、耕作土の直下に瓦を多量に含む時期不明の包含層、その下に遺構検出面である地山及び整地土が堆積している。西半部の基本層序は、表土－近現代の整地土－十字廊の基壇土および整地土(奈良～平安)－地山である。 - 主な検出遺構 - 礎石建物3棟 ①十字廊：東西廊・南北廊よりなる。それに伴う礎石の据付穴、基壇外装、雨落溝等を検出した。 東西廊：桁行11間、梁行1間のうち、東から7間分を検出した。柱間寸法は、桁行が12尺～15尺と場所により異なり、梁行は17尺。基壇南北幅は約8m。基壇外装は凝灰岩製で、地覆石を用いず羽目石を地面に直接立てる。羽目石が一部で遺存する。 南北廊：桁行5間以上、梁行1間、柱間寸法は、桁行が10尺～12尺と場所により異なるが、梁行は17尺。基壇規模は東西幅が約8m、南北約21m。基壇外装はやはり凝灰岩製で羽目石を地面に直接立てる。玉石組の雨落溝(幅約80cm)を一部に残す。 ②東小子房：西端の桁行1間分、梁行2間分を検出した。柱間寸法は、桁行が10尺、梁行が7尺。 ③礎石建物：調査区北端で南北1間分を検出した。柱間寸法は12尺。 (2) 土坑：瓦片や土師器を含む土坑が、調査区内に散在する。 (3) 石敷：十字廊と北側の礎石建物の間に位置する。 - 主な出土遺物 調査区全体から創建時のものを含む瓦片及び土器片が大量に出土し、調査区東方の土坑からは土師器皿がまとまって出土した。また、調査区中央付近の土坑から銅製の螺髪が出土した。 - 調査所見 十字廊の建物と基壇の規模がほぼ確定した。『薬師寺縁起』に記載された東西廊の長さは14丈1尺であり、発掘調査成果とおおむね一致する。南北廊については南北端が現存せず明確ではないが、およそ一致するものと見られる。十字廊の中央付近に掘り込まれた11世紀代の土器を多量に含む土坑により、奈良時代後半に始まる十字廊が、この時期にはこの場所に建っていなかったと考えられる。また、十字廊の周囲の施設、特に十字廊の北側や東側の空間利用についても新たな知見を得た。今回の調査では、薬師寺内部の施設配置という面だけでなく、全国的にもほとんど明らかにされていない古代寺院における食堂の背後の具体的な様相を明らかにしたという面でも、貴重な成果となった。			
【実績値】 論文数等 2件 (①・②) ① 奈良文化財研究所編『薬師寺 旧境内保存整備にともなう発掘調査概報 II』薬師寺、2014.3 ② 庄田慎矢ほか「薬師寺旧境内の調査 第519次」『奈良文化財研究所紀要2014』奈良文化財研究所、2014.6(予定) (参考値) 出土遺物：軒丸瓦189点、軒平瓦211点、鬼瓦9点、隅木蓋瓦1点、磚1点、丸瓦・平瓦コンテナ2072箱、土器・土製品コンテナ22箱、木製品等51点、金属製品等19点、その他コンテナ1箱 記録作成数：実測図59枚(A2判)、遺構写真66枚(4×5)			
【受託経費】 19,877千円			



調査区全景(北東から)

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8010

業務実績書(受託事業)

研№15-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	西大寺旧境内(弥勒金堂東方)の発掘調査(受託)((1)ー⑥ーア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 箱崎和久(遺構研究室長)、馬場 基(都城発掘調査部主任研究員)、庄田慎矢・諫早直人(考古第一研究室研究員)、小田裕樹(考古第二研究室研究員)、中村一郎(写真室主任)、栗山雅夫(写真室技術職員)、鎌倉 綾(写真室技能補佐員)			
【年度実績概要】 集合住宅建設に伴う事前調査。調査面積は460㎡、調査期間は25年12月3日～26年2月7日。 ・基本層序 上から、旧駐車場の造成土(厚さ約20cm)、旧耕作土・床土(約20cm)、中・近世の遺物包含層(約10cm)、西大寺の整地及び基壇土(約20～60cm)、奈良時代前半の整地土(約5～10cm)、地山(暗褐色粘質土及び灰褐色粗砂)の順。遺構検出面は標高74.90～75.10mの西大寺の整地土及び基壇土の上面である。 ・検出遺構 南北棟礎石建物(西大寺金堂院東面回廊)1棟、それに伴う南北溝2条(回廊東・西雨落溝)、東西溝1条、回廊東方の礎石建物1棟、瓦組井戸1基、整地土下層落ち込みである。検出した金堂院東面回廊は桁行6間以上の複廊である。柱間寸法は桁行・梁行とも12尺等間。礎石据付穴は一边約1.2～1.4mで人頭大～40cmの石を含む壺地業を行う。基壇は黄灰色粘質土と灰色砂質土を約40～50cm積み上げる。基壇外装は抜き取られている。 ・出土遺物 西大寺東西両塔所用瓦と同型式の軒丸瓦・軒平瓦が出土した。また南北溝より奈良三彩盤片が出土したほか、金堂院東方の整地土下層から丸太材や建築部材未成品が出土した。 ・調査成果 本調査により、西大寺金堂院東面回廊を検出した。また西雨落溝が調査区西北隅で西へ折れると想定されることから、本調査区北側に北面回廊が取りつくと推定される。また、回廊東方の礎石建物は文献史料に記載がなく、従来想定されていなかった建物であり、新たな知見である。また、西大寺造営以前の遺構や西大寺に関わる各遺構・整地土の重複関係から、西大寺金堂院の造営過程の実態を捉えることができた。 本調査により、西大寺の中核伽藍である金堂院全体の配置や造営過程を明らかにする重要な手掛かりが得られた。これは、西大寺中核部の実態に迫る上で極めて高い学術的意義をもつ。			
【実績値】 論文等数:1件(①) ①小田裕樹ほか「西大寺旧境内(弥勒金堂東方)の調査 一第521次」『奈良文化財研究所紀要2014』奈良文化財研究所、2014.6(予定) (参考値) 出土遺物:軒丸瓦77点、軒平瓦62点、丸瓦・平瓦整理用コンテナ476箱、土器・土製品整理用コンテナ13箱、出土木材・部材4点。 記録作成数:実測図20枚(A2判)、遺構写真4枚(4×5)。			
【受託経費】 5,668千円			



調査区全景(北西から)

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8011

業務実績書(受託事業)

研No.18-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	藤原宮跡（法花寺水路改修）発掘調査(受託)（(1)－⑥－ア）		
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 森川実（都城発掘調査部主任研究員）、大澤正吾（考古第二研究室研究員）、大林潤・前川歩（遺構研究室研究員）、南部裕樹（考古第二研究室アソシエイトフェロー）、井上直夫（写真室再雇用職員）、栗山雅夫（写真室技術職員）			
【年度実績概要】 本調査は、法花寺町地内の水路改修に伴うものである。 調査地点：173-1 次調査地に隣接する南側。農水路が東二坊大路の東側溝の推定地に重なる。 調査目的：東二坊大路に伴う条坊側溝の確認等 調査期間：25 年 11 月 5 日（火）～12 月 6 日（金）。 調査面積：400 m ² （全長約 100m、幅 1.5m の調査区を設定。西に 5 ヲ所、東に 2 ヲ所の計 7 ヲ所の拡張区を設定） 調査成果：拡張区内を中心に東側溝を調査区各所で確認。 三条条間路の想定位置にも拡張を行ったが、掘削の結果、条間路の南北側溝は調査区外に位置することが判明し、検出はできなかった。 その他、飛鳥時代頃の流路及び古墳時代の土坑を検出。 条坊側溝と関連する遺物 土師器は杯など、須恵器は杯・壺・甕などが出土しており、飛鳥時代後半に位置づけられるものである。瓦は複弁蓮華文軒丸瓦が 2 点、重弧文軒平瓦が 1 点、そのほかに丸瓦・平瓦が出土した。また、古墳時代の土坑内から土師器の壺・甕・高杯などが出土している。その他に、スクレイパー 1 点と、剥片数点があるが、所属時期は不明である。 全長約 100m にわたっての調査で、部分的にはあるが、東二坊大路の東側溝を確認することができた。調査で得られた測量値も、これまでの調査成果と矛盾せず、東二坊大路の延長に関して、より精度の高い計算値が得られた。 出土遺物：土師器・須恵器はコンテナで 4 箱分、 瓦はコンテナで 2 箱分、 石器が数点出土。			
			
調査区全景（北から）			
【実績値】 出土遺物 軒瓦 5 点、丸平瓦 1 箱、土器 4 箱、石器 5 点、榛原石 1 点 記録作成数 遺構実測図：22 枚、写真（4×5）：12 枚、写真（デジタル）：56 枚 論文等数 南部裕樹「左京三条三坊の調査-第 178-7 次」『奈文研ニュース』No. 52、2014. 3 南部裕樹「左京三条三坊の調査-第 178-7 次」『奈良文化財研究紀要 2014』奈良文化財研究所 2014. 6(予定)			
【受託経費】 2,314 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8012

業務実績書(受託事業)

研 No. 18-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	本薬師寺跡、藤原京跡(右京八条三坊)発掘調査(受託)((1)-⑥-ア)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 黒坂貴裕(都城発掘調査部主任研究員)、諫早直人(考古第一研究室研究員)、南部裕樹(都城発掘調査部アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)、飯田ゆりあ(写真室技能職員)			
【年度実績概要】 個人住宅建設に伴い、本薬師寺旧境内の発掘調査を実施した。今回の調査地は、中心伽藍の金堂跡からみて北西にあたり、平城京の薬師寺伽藍を本薬師寺に重ねてみた場合、西面僧坊が存在する位置にあたる。また、奈良文化財研究所がかつて調査を行った、本薬師寺 1994-1 次調査地や飛鳥藤原 143-3 次調査地に隣接している。 宅地の西辺及び南辺に沿って、幅 4 m の調査区を「L」字形に設定した。南北長 18.5m、東西長 8.5m で、調査面積は 92 m ² である。 上層遺構面では、耕作溝や近現代に深掘りされた土坑・穴・井戸を検出しただけであり、それらを掘削・除去しても、本薬師寺に関わる遺構は検出できなかった。下層では、南北 2 ヶ所で自然流路が検出された。北側の流路は、基盤層の砂層上面からの深さ約 40 cm、幅約 3.0～3.5m であり、溝幅は南西が狭く北東が広いので、この方向に流れていたと考えられる。南側の流路は、調査区内で X 字状に交差して検出している。断面や断ち割りの観察では、北側の流路とは反対に東から西に流れており、錯綜した状況がうかがえる。南北の流路ともに、若干の遺物が堆積層から出土しているものの、小片であり時期を特定できていないが、確実に飛鳥時代をさかのぼるものである。 これらの流路が埋没する洪水堆積があった後、耕作が行われて、最終的に藤原宮期の遺構面を形成されたと考えられる。 今回の調査地では、中世以降に耕作が行われたようであり、近現代になって宅地に改変されている。調査区西南で検出した井戸は宅地に伴うものであり、現代の造成によって埋められている。 調査地内では、土師器・須恵器・中近世土器はコンテナで 1 箱分、瓦は、コンテナで 3 箱分が出土している。本薬師寺創建に関わる遺物として、複弁蓮華文軒丸瓦、偏向唐草文軒平瓦・偏向忍冬唐草文軒平瓦、その他に丸瓦・平瓦が出土した。また、須恵器・土師器類にも飛鳥時代に位置づけられると考えられる破片が出土している。すべて、上層の造成土・耕作土層からの出土であり、特に古代の遺構に関わって出土したものではない。 今回の調査地では、本薬師寺に関わるような飛鳥時代後半に位置づけられる遺構は存在していなかった。隣接する既調査地も同様の状況であり、西面僧坊周辺は、遺構の希薄な現況であることが追認される結果となった。			
			
発掘調査区全景			
【実績値】 出土遺物 瓦 3 箱、土器 1 箱 記録作成数 遺構実測図：9 枚、写真（4×5）：カラー 6 枚・白黒 10 枚、写真（デジタル）：24 枚 南部裕樹「本薬師寺跡の調査-第 178-11 次」『奈良文化財研究紀要 2014』2014. 6(予定)			
【受託経費】 999 千円			

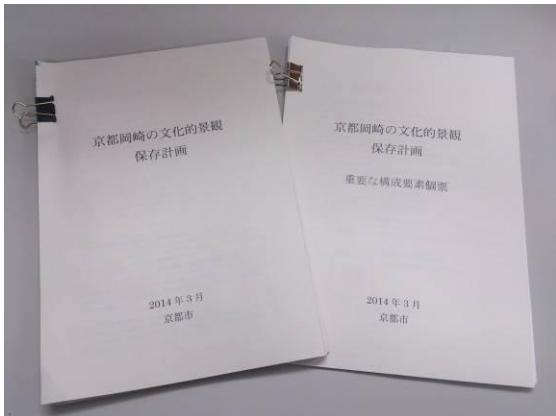
【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8013

業務実績書(受託事業)

研No.24-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	京都岡崎の文化的景観保存計画策定調査(受託)((1)～⑦)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 平澤 毅
【スタッフ】 恵谷浩子(景観研究室研究員)、菊地淑人(景観研究室アソシエイトフェロー)			
【年度実績概要】			
・「京都岡崎の文化的景観保存計画書」の執筆及び図版作成、「重要な構成要素個票」作成を行った。 保存計画案策定にあたっては、現地調査(延べ6回)及び京都市・京都府・文化庁との協議(延べ18回)を行った。 ・保存計画案は、「京都岡崎の文化的景観保存計画策定委員会」等(計5回)において報告するとともに、各委員からの意見を集約し、修正作業を進めた。 ・京都岡崎の文化的景観保存計画策定委員会の議事録を作成した。 ・保存計画策定に向けた普及啓発及び合意形成活動として、 (1)白川を創る会が主催する「白川ワークショップ」の企画立案・司会進行等(計3回) (2)各種イベントの実施協力(まちあるき、古写真展、中学校ワークショップ) (3)地域住民への説明会(計2回) (4)白川ワークショップ成果をまとめた冊子「白川こみちの葉」の作成・印刷等を行った。			
			
保存計画書と重要な構成要素個票		古写真展の実施	
【実績値】			
保存計画書：1点			
保存計画重要な構成要素個票：1式			
普及啓発事業：8回			
地域配布印刷物：1点			
デジタル写真：487点			
【受託経費】			
2,153千円			

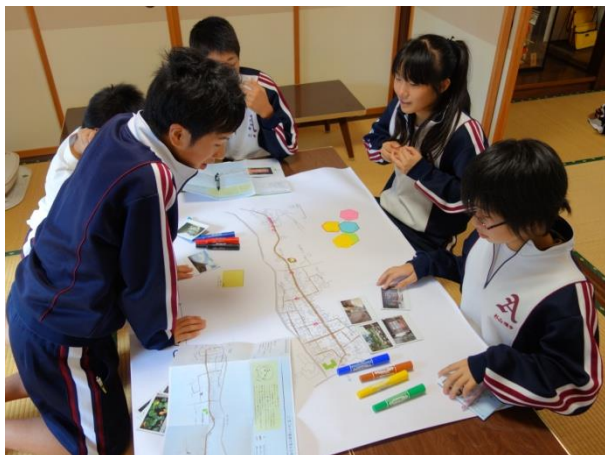
【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8014

業務実績書(受託事業)

研No.24-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	相川地区文化的景観保存計画策定調査（受託）（(1)－⑦）		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 平澤 毅
【スタッフ】 恵谷浩子（景観研究室研究員）、菊地淑人（景観研究室アソシエイトフェロー）、大平和弘（前遺跡整備研究室アソシエイトフェロー）、鎌倉 綾（写真室技術補佐員）			
【年度実績概要】 ・「佐渡相川の鉱山都市景観保存調査報告書」作成に向けた補足調査、編集協力、原稿執筆及び大判写真撮影等を行った。また、あわせて、「佐渡相川の鉱山都市景観全覧図」の作成を行った。 ・「佐渡相川の鉱山都市景観保存計画書」の執筆及び図版作成、「重要な構成要素個票」作成を行った。 保存計画案策定にあたっては、現地調査（延べ10回）及び新潟県・佐渡市との協議（延べ20回）を行った。 ・普及啓発活動として、 (1)地元向けの刊行物「あいかわらばん」の編集・印刷（年9回） (2)「あいかわ発見まっぷ」（上町編・下町編）の作成・印刷 (3)普及啓発パンフレットの編集・印刷 (4)各種イベントの実施協力（まちあるき（あいかわ発見まちあるき）、写真展（あいかわ発見展）、中学校ワークショップ）等 を行った。 ・普及啓発及び合意形成のための住民座談会「あいかわ座談会」の開催に協力し、各回への参加及び説明等を行った（延べ15回）。 ・「佐渡金銀山調査指導委員会（文化的景観専門分野会議）」へ出席し、資料説明等を行った（年3回）。 ・「佐渡金銀山世界遺産学術委員会」へオブザーバーとして出席し、文化的景観保存と世界遺産の取組をつなげるための情報収集を行った。			
			
相川中学校とのワークショップの実施		取組の一環としての刊行物（作成協力）	
【実績値】 保存計画書：1点 保存計画重要な構成要素個票：1式 普及啓発パンフレット：2点 普及啓発関連地域配布物：11点 報告会発表件数：5件 デジタル写真：643点			
【受託経費】 5,886 千円			

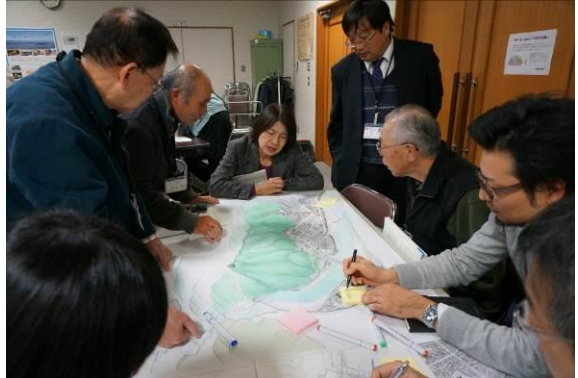
【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8015

業務実績書(受託事業)

研No.24-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平成25年度長良川流域の文化的景観における普及啓発事業支援業務委託(受託)((1)ー⑦)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 平澤 毅
【スタッフ】	恵谷浩子(景観研究室研究員)、菊地淑人(景観研究室アソシエイトフェロー)		
【年度実績概要】	- 重要文化的景観選定の答申を受けた「長良川中流域における岐阜の文化的景観」の全覧図を作成した。なお、全覧図の作成にあたっては、現地調査(延べ4回)及び岐阜市との協議(延べ2回)を行った。 - 重要文化的景観の選定に向けた住民対象のワークショップの運営(企画立案・司会進行等)を行った。ワークショップは計4回実施し、その間、ワークショップ成果を簡単にまとめた地域配布チラシも作成した。  作成した全覧図  全覧図を用いたワークショップの様子		
【実績値】	全覧図：1点 住民対象のワークショップ：4回 地域配布印刷物：1点		
【受託経費】	490 千円		

【受託】
(様式 3)

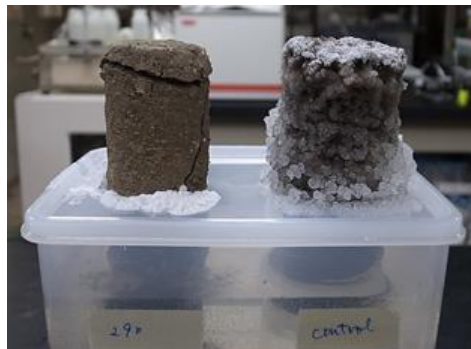
施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8016

業務実績書(受託事業)

研No.26-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	元町石仏が彫刻された凝灰岩の不飽和水分移動特性に関する研究(受託)((1)－⑧－イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、脇谷草一郎、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)			
【年度実績概要】 大分県大分市に位置する史跡大分元町石仏は、軟弱な溶結凝灰岩から構成される段丘崖の底部に彫刻された磨崖仏である。冬期に石仏表面において多量の塩類(硫酸ナトリウム)が析出するため、塩類風化による石仏の劣化が深刻な状況にある。 石仏には古くから覆屋(お堂)が設けられていたため、石仏表面は常に水分蒸発の場となってきた。そして、石仏表面で蒸発する周辺の浅層地下水は多量の溶質を含み、これらが乾季に塩として析出する際に石仏の塩類風化を引き起こすと考えられる。さらに、高湿度時期に塩は潮解して再び岩内部へ浸透するため、塩は石仏表層に濃集していると推察される。従って、元町石仏の保存方法を検討するためには、石仏が彫刻された凝灰岩の水分移動特性を把握することが不可欠である。 本研究では、円柱状に整形された凝灰岩の下部を水に浸して給水し、γ線水分計を用いて、凝灰岩の含水率鉛直分布を一定間隔で測定した。このときの含水率測定結果に対して逆解析を行い、既存の水分移動モデル(ここでは van Genuchten-Mualem モデルを使用)のフィッティングパラメータを推定した。 また、石材の保存処理では基質強化及び撥水处理が頻繁に実施されるが、これらの処理は遺物表面の水分移動特性を大きく変化させるものである。元町石仏のように塩を含んだ水分の供給源を有する場合には、塩の析出による遺構の劣化に対して、むしろ逆効果を示す場合が危惧される。そこで、本研究では、同様に円柱状に整形された石材試料をもちいて、無処理のもの、及び撥水处理を施したものに対して、塩類析出促進実験を行った。 その結果、無処理試料では試料表面全体から塩が析出するものの、石材表面からは粉状化した石材が落下するにとどまった。一方、撥水处理を施した試料では、石材表面から塩の析出は認められないが、石材表層が層状に大きく剥離した。以上の結果から、本石仏においては、表面の撥水处理は適切なものとはいえず、昨年度に実施したフェイシング材料を使用する脱塩方法を実施すべきと考えられる。			
【実績値】 分析点数：6 点 事業報告書：1 件 『元町石仏が彫刻された凝灰岩の不飽和水分移動特性に関する研究』2014. 3			
【受託経費】 498 千円			



塩析出促進実験(左：撥水处理、右：無処理)

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8017

業務実績書(受託事業)

研No.26-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国史跡田熊石畑遺跡墓域整備に伴う環境調査(受託) ((1)－⑧－イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）、脇谷草一郎、田村朋美（保存修復科学研究室研究員）			
【年度実績概要】 宗像市に位置する田熊石畑遺跡では、弥生時代中期前半頃の6基の墳墓全てから、計15点の銅剣、銅矛及び銅戈の青銅製品が出土している。しかし、墓域には未だ発掘調査が行われていない墳墓が存在し、これまでの調査結果から、それらの墳墓にも青銅製品が埋蔵されている可能性が非常に高い。 昨年度は、遺跡を構成する土壌の熱と水分の移動特性に関する物性値を捉え、現状と盛土をした場合での熱と水分移動の解析を行って、盛土による埋蔵環境の改善方法を検討した。 今年度は、埋蔵環境に大きく影響を及ぼす外界気象条件の測定と、土中の埋蔵環境についての実測調査を開始した。具体的には、外界気象条件として、 ・外気温度及び湿度 ・大気圧 ・水平面全天日射量 ・降水量 ・風向及び風速 について測定を開始した。また、土中の埋蔵環境として、金属製遺物の腐食に大きく影響を及ぼす因子である酸素濃度と水分量の測定を開始した。 今後は、外界気象条件が最低でも1年間分測定された段階で、あらためて数値解析を実施するとともに、埋蔵環境を模して金属製遺物の腐食に関する室内実験を実施する予定である。		 気象観測装置	
		 土中観測装置	
【実績値】 事業報告書：1件 『国史跡田熊石畑遺跡墓域整備に伴う環境調査業務委託』2014.3 研究発表：1件 脇谷草一郎・高妻洋成「田熊石畑遺跡における青銅器埋蔵環境の変遷に関する研究」日本文化財科学会第30回大会、2013.7			
【受託経費】 821千円			

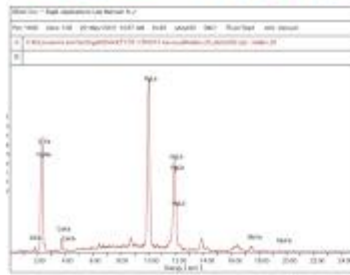
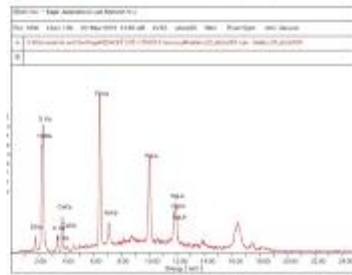
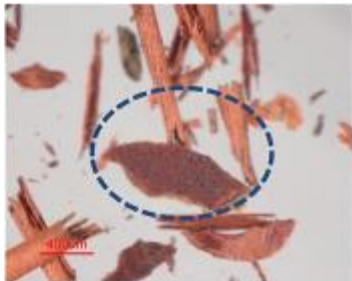
【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8018

業務実績書(受託事業)

研No.26-3

中期計画の項目	4 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	建中寺における文化財建造物の彩色塗装材料の調査研究(受託)(1)－⑧－イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎・田村朋美(以上、保存科学修復研究室研究員)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、赤田昌倫(保存科学修復研究室アソシエイトフェロー)			
【年度実績概要】 名古屋市建中寺の複数の文化財建造物について、修理に伴う塗り直しを前提とした彩色塗装材料の調査を行った。その結果、展色材については漆と膠を、色料としては顔料と染料が使用されていることを明らかにした。 - 赤色塗装について複数の部材から試料採取し分析を行った結果、透塀柱と拝殿格縁からは漆が検出された。渡殿の垂木からは展色材に関連する分析結果は得られなかった。 - 色料については、透塀柱には鉄系赤色顔料が用いられていることがわかった。拝殿格縁については下層から鉄系赤色顔料が、上層からは水銀朱が検出された。また、こぶし鼻については、赤色の顔料粒子が認められない点や分光分析の結果から、染料(えんじ)が使用された可能性があることがわかった。 - 本殿木負は緑色塗装で施工されている箇所があり、濃い緑については緑青が、淡い緑については白緑が使用されていることがわかった。			
朱色部  赤褐色部 			
【実績値】 報告書：1 件 『建中寺における文化財建造物の彩色塗装材料の調査研究報告書』2014. 3 分析点数：14 点			
【受託経費】 297 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8019

業務実績書(受託事業)

研No.27-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	史跡ガランドヤ古墳1号墳における熱・水分同時移動解析に関する研究(受託) ((1)－⑧－ウ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、脇谷草一郎、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)			
【年度実績概要】 日田市に位置する史跡ガランドヤ1号墳では、奥壁を中心に、装飾が描かれた石材表層の剥離が進行している。剥離による石材の劣化は、石材表面における結露の発生と乾燥を繰り返す“乾湿風化”、及びそれに伴う析出物の発生が主要因と考えられる。従って、石材の劣化を抑制し、装飾を保存するためには、結露の発生を抑制することが重要である。 現在、ガランドヤ1号墳では整備工事が進行中であり、露出した石室を覆うコンクリート製躯体の建設が進められている。今年度は、これまで石室横に設置されていた気象観測の装置を着工に際して移設し、外界の気象条件、及び石室内の温熱環境について実測調査を継続している。 また、今年度も引き続き石室内の結露発生を抑制する手法として、数値実験による石室内空気への加熱と、躯体内部空間の地表面への断湿材の適用について検討した。冬期は積極的な換気、夏期は換気を抑制することで、石室内空気は絶対湿度は年間を通して低い値を維持し、室空気の温度は年周期の振幅が小さな安定した状態を維持できる見通しが得られた。 特に、(1)夏期に石室内空気に対して熱源を使用することで、石材表面温度を上昇させ、結露発生のリスクを軽減し得ること、(2)冬期の湿気のソースは土壌からの水分蒸発と考えられるが、石室床面と比較して圧倒的な面積を占める躯体内部空間の地表面を断湿とすることで、冬期の絶対湿度を低下させることが可能となり、躯体内側表面の結露を抑制し得ることが推定された。従って、夏期の熱源の使用と地表面の断湿は、ガランドヤ古墳の保存環境制御において非常に効果的と考えられる。以上の結果は、今後整備が実施される他の古墳の保存方法を検討する上で、有益な知見を提供するものといえる。			
【実績値】 事業報告書：1件 『史跡ガランドヤ古墳1号墳における熱・水分同時移動解析に関する研究』2014.3 論文：1件 脇谷草一郎・高妻洋成「史跡ガランドヤ古墳の保存に関する研究―石室保護施設の設置による結露性状変化の検討―」『奈良文化財研究所紀要2013』2013.6			
【受託経費】 398千円			



移設された気象観測装置

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8020

業務実績書(受託事業)

研No.29-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	ネットワーク型遺跡調査システムの開発(受託)((2)-②)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	主任研究員 金田明大
【スタッフ】			
【年度実績概要】 - 独立行政法人科学技術振興機構(JST)の受託事業として、(株)ラング、岩手大学、宮古市教育委員会、(有)三井考測と共同で、東日本大震災復興関連の埋蔵文化財発掘調査における記録成果の質的な向上と効率化を目的とするネットワーク型遺跡調査システムの開発を実施し、技術及び行政的な観点から、開発担当である(株)ラングと岩手大学に助言を行った。 - 福島県及び本研究所の発掘調査現場などで、計測試験を実施した。			
			
計測試験例			
【実績値】 計測試験地点：4 地点 成果報告：1 件 JST マッチング促進プログラム中間報告会「ネットワーク型遺跡調査システムの開発」(2013.11.7、JST 盛岡)			
【受託経費】 368 千円			

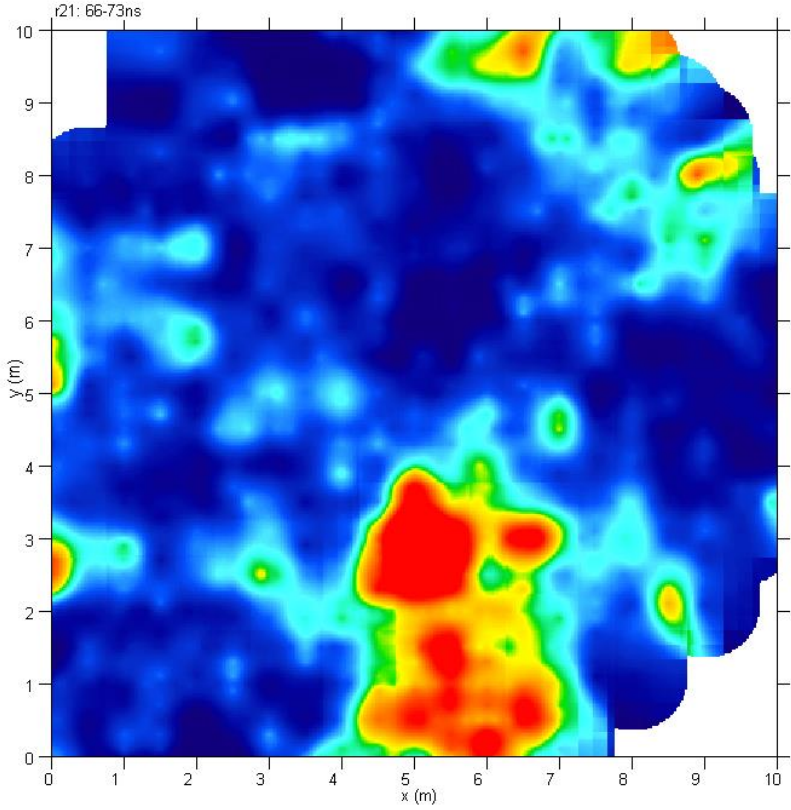
【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8021

業務実績書(受託事業)

研No.29-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	鬼ノ岩屋古墳総合的探査委託業務（受託）（2）－②）		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	主任研究員 金田明大
【スタッフ】 西口和彦（桜小路電機、客員研究員）			
【年度実績概要】 大分県別府市に所在する鬼ノ岩屋古墳群は、複室構造の石室を有する2基の古墳が現存し、壁画をもつ古墳として国史跡に指定されている。これらの古墳の保全を目的とした調査の一環として、石室周辺の構造や墳丘の状況を検討するため、別府市からの受託調査として、物理探査を共同で実施することとした。 現地作業は2月16～21日に行った。草刈りなどの環境整備から開始し、測線設定の後、270MHzと400MHzのアンテナを用いた地中レーダー探査と、Wenner法の電極配置による電気探査を実施した。 成果は現在解析中であるが、石室西側に異常部の存在が指摘でき、風倒木や土砂の流出などによる可能性が高い。また、石室の控え積みはそれほど幅広くはないことが予想される。今後、さらに処理を進めていく予定である。			
 計測成果例（赤い反射部分が石室）			
【実績値】 計測試験地点：2地点 成果報告：1件 『鬼ノ岩屋古墳総合的探査報告』			
【受託経費】 800 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8022

業務実績書(受託事業)

研No.30-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	宝城坊本堂の年輪年代調査(受託) (2) - (3)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	埋蔵文化財センター長 難波洋三
【スタッフ】 大河内隆之(埋蔵文化財センター主任研究員)、星野安治(年代学研究室研究員)、児島大輔(年代学研究室アソシエイトフェロー)			
【年度実績概要】 ・ 神奈川県伊勢原市・宝城坊本堂(重要文化財)の解体修理工事に伴い、同堂部材の年輪年代調査を行った。また、同堂の建築部材の樹種同定調査及び放射性炭素年代測定調査もあわせて実施した。 ・ 現地調査を3回、延べ13日間行った。年輪年代調査に際しては、高解像度のデジタル一眼レフカメラを用いて各建築部材の年輪計測用画像を撮影し、当研究室においてデジタル画像を用いた年輪計測を行う方法を採用した。現地調査では、82部材を調査対象とした。 ・ 樹種同定調査は、現地で建築部材の小片を採取し、これを当研究室に持ち帰って、木口・柂目・板目の3断面の透過標本(木材組織プレパラート)を作製し、生物顕微鏡で観察する方法で実施した。調査は23部材を対象とした。 ・ 放射性炭素年代測定調査については、現地で微量の試料を採取して測定に供した。調査は15点の試料を対象とした。同調査は、樹種や年輪数が年輪年代調査に不向きな部材を対象とすることで、両調査方法がお互いに補完しあい、より精度の高い年代情報を多くの部材から得るために行った。なお、同調査では、試料採取及び計測結果の解釈等において、国立歴史民俗博物館教授・坂本稔、武蔵大学総合研究所・中尾七重両氏の協力を得ている。 ・ 以上の調査により、現在の宝城坊本堂が鎌倉時代に遡る前身建物の部材を転用していることがほぼ確実となった。このほか、修理の履歴をあとづける年代についても明らかとなっており、同堂の建築史的理解に不可欠な年代情報を得ることができた。			
			
宝城坊本堂飛檐垂木の年輪年代調査風景			
【実績値】 年輪年代調査点数：82点。 樹種同定調査点数：23点。 放射性炭素年代調査点数：15点。			
【受託経費】 1,683千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8023

業務実績書(受託事業)

研No.30-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝薬師寺東塔木材年代測定業務（第1回）（受託）（(2)－③）		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	年代学研究室研究員 星野安治
【スタッフ】 兄島大輔（年代学研究室アソシエイトフェロー）			
【年度実績概要】 ・ 国宝薬師寺東塔の解体修理工事に伴い、同塔構成部材の年代測定を行って、建立年代及び建立後の修理経過を推定する資料を得るための調査を実施した。 ・ 対象部材は、奈良県職員と協議の上、樹皮・辺材の有無等に注視するほか、当初材は無論のこと、いわゆる中古材と分類される材や近世以降の修理材と目される部材も含めて、可能な限り悉皆的に調査することを旨とした。 ・ 年輪年代測定は、ヒノキ、スギ及びケヤキ材のうち、水平断面（木口）もしくは放射断面（柁目）で年輪数100層以上確認し得るものを優先した。選定部材のうち、153点について年輪計測用画像を高精細カメラで撮影した。 ・ 放射性炭素年代測定は、辺材が残存していること、年輪数が少ないこと、また暦年の確定した日本産樹木の年輪変動パターン（暦年標準パターン）の整備されていない樹種であることを基本選定条件とし、10点の部材について試料を採取した。			
			
薬師寺東塔の年輪年代調査			
【実績値】 年輪年代調査点数：153点 放射性炭素年代調査点数：10点			
【受託経費】 1,906千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8024

業務実績書(受託事業)

研No.31-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平成 25 年度小竹貝塚出土動物遺存体同定調査業務 (受託) ((2)－④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	研究員 山崎健
【スタッフ】	丸山真史 (前橿原考古学研究所非常勤職員、客員研究員)、菊地大樹 (前アソシエイトフェロー、客員研究員)		
【年度実績概要】	- 小竹貝塚の発掘調査で出土した 55,439 点の動物遺存体(縄文時代前期中葉～末葉)を同定した。同定された分類群は、魚類 40 分類群、両棲爬虫類 3 分類群、鳥類 19 分類群、哺乳類 28 分類群の合計 90 分類群である。 - 魚類は 29,596 点を同定した。スズキ属、クロダイ属、コイ科が多く出土し、主に汽水域～淡水域で漁獲していたと推定される。 - 鳥類は 594 点を同定した。カモ亜科やカイツブリ科が多く出土し、主に汽水域～淡水域で狩猟していたものと考えられる。 - 陸棲哺乳類は 8,059 点を同定した。ニホンジカが多く、次いでイノシシ、イヌ、タヌキ、カワウソ、キツネが出土した。また、発掘調査で 16 個体の埋葬犬が検出されていたが、整理作業でも 5 個体について埋葬犬の可能性が高いと判断した。 - 海棲哺乳類は 3,152 点を同定した。クジラ目はカマイルカとマイルカ属が主体であり、そのほかハナゴンドウ、ハンドウイルカ、シャチが含まれていた。鰭脚亜目ではニホンアシカを同定した。 - 分析結果をまとめると、魚類ではクロダイ属・スズキ属・コイ科、鳥類ではカモ亜科・カイツブリ科、哺乳類ではカワウソなど、遺跡至近に広がる汽水域～淡水域に生息する動物が多く出土している。 遺跡周辺の古環境を考慮すると、小竹貝塚では遺跡至近の汽水域～淡水域において狩猟や漁撈といった生業活動を行っていたと考えられる。一方で、カマイルカやマイルカ属といったイルカ類を積極的に獲得しており、富山湾に季節的に来遊したカマイルカの群れを対象とした漁撈活動を行っていたことがわかる。また、背後の呉羽丘陵などでは、ニホンジカを中心とした狩猟活動が推測される。 - 小竹貝塚が形成された縄文時代前期中葉～末葉は、縄文海進の影響で沿岸環境が大きく変容していたと推測されるが、小竹貝塚における狩猟や漁撈といった生業活動は、基本的に変化しなかったことが明らかとなった。		
【実績値】	分析点数：55,439 点		
【受託経費】	8,756 千円		



小竹貝塚から出土したイルカ類の骨

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8025

業務実績書(受託事業)

研No.31-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	陸前高田市堂の前貝塚出土の動物遺存体の分析委託業務（受託）（2）－④）		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	研究員 山崎健
【スタッフ】 丸山真史（前橿原考古学研究所非常勤職員、客員研究員）、松崎哲也（京都大学大学院生）			
【年度実績概要】 ・ 堂の前貝塚（岩手県陸前高田市）から出土した動物遺存体の分析を行った。 ・ 動物遺存体の保存状態が良好でなく、脆弱な資料が多かったため、資料の状態に応じてパラロイド B-72（アセトンで5～10%に希釈）を使用して補強した。 ・ 採取された土壌については、微細資料が含まれている可能性があるため、フルイを用いて土壌選別を行った。 ・ 貝類 65 点、魚類 166 点、哺乳類 135 点の計 366 点の動物遺存体を同定した。 ・ 現場採集資料では、貝類はマガキやチジミボラ、哺乳類はニホンジカとイノシシが多く出土し、魚類はマグロ属に集中した。水洗選別資料では、貝類はイガイ科、魚類はニシン科などが多く出土した。 ・ 土壌選別により、これまで堂の前貝塚では知られていなかった非常に小さな釣針を検出することができた。			
			
堂の前遺跡から出土した脆弱資料の強化処置			
【実績値】 分析点数：366 点			
【受託経費】 590 千円			

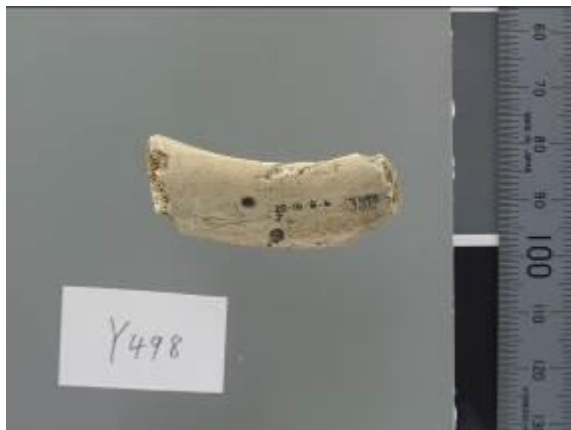
【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8026

業務実績書(受託事業)

研No.31-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	陸前高田市立博物館所蔵骨角器抜本修復業務（受託）（(2)－④）		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎・田村朋美（保存修復科学研究室研究員）、降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）、赤田昌倫（保存修復科学研究室アソシエイトフェロー）			
【年度実績概要】 ・ 陸前高田市立博物館所蔵骨角器は東日本大震災の大津波により被災したのち、奈良文化財研究所で応急処置を施し保管している。その恒久的保存と活用を図るため、昨年度に引き続き、当該資料の抜本修復を行った。 ・ 被災した骨角器について、素材の種類及び部位を同定した。また、骨角器の器種名を付与し、骨角器資料一覧を作成した。 ・ 骨角器はアルコール等の滅菌剤を用いて滅菌を行った。津波により付着したヘドロなどは、エチルアルコール、酢酸エチル、アセトンにより除去した。 ・ 骨角器表面に付着している黒色物質については、その一部が油脂性物質であることがわかった。これは被災時に付着した重油ではなく、アスファルトの可能性が考えられたため、脱塩及びクリーニング時には注意して処理を行った。 ・ 骨角器に含まれる塩分を超純水により除去した。塩分の除去量を確認するため、イオンクロマトグラフィによる塩化物イオン濃度の測定を行い、塩分の除去後、遺物を損傷しないよう乾燥処置を施した。 ・ 脆弱な遺物に対しては、アクリル樹脂（商品名：パラロイドB72）の5%アセトン溶液を用いて強化処置を施した。破損した資料で接合可能なものは、アクリル樹脂により接合を行った。 ・ 個々の骨角器の保存修復の記録を作成した。			
			
アスファルト状物質の付着状態		脱塩後の骨角器	
【実績値】 報告書：1 件 『平成 25 年度 陸前高田市立博物館所蔵骨角器抜本修復業務における脱塩作業報告』2014. 2 処理点数：830 点			
【受託経費】 3,198 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8027

業務実績書(受託事業)

研No.31-4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	東名遺跡出土動物遺存体調査(受託)((2)－④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	前埋蔵文化財センター長、客員研究員 松井章
【スタッフ】	大江文雄(愛知県環境審議会専門調査委員、客員研究員)、丸山真史(前橿原考古学研究所非常勤職員、客員研究員)		
【年度実績概要】	東名遺跡群の貝塚からは多数の動物遺存体が出土しており、これまでに甲殻類、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類の同定を行い、報告してきた。魚類には、骨以外に耳石が多数含まれ、今年度の受託研究ではこの耳石の魚種同定を行った。 耳石は約1,000点が出土しているが、今年度はそのうち500点の種同定を行い、9科12種を同定することができた。スズキ科、ニベ科、タイ科、ボラ科が中心であり、これら4種類で全体の89.4%を占めている。出土した耳石が、この4種類に集中していることは、極めて選択的な漁労か、漁労水域の環境を反映している。また、最小で1mm目のフルイを用いて、貝層の土壌を水洗選別しているにもかかわらず、採集した耳石にはイワシ類やハゼ科などの小型個体が少ないことが特徴的であり、中型～大型魚に集中した漁労が営まれていたことを示している。 注目されるのは、現在の有明海に生息しない大型のニベ科の一種であるホンニベ(Miichthys miiuy)の耳石が含まれていることである。最も大きなものでは耳石長が30.4mmを測り、体長2m前後と推定される。現在の黄海や東シナ海では、体長40～50cm程度の個体が一般的に漁獲される大きさであり、体長2mのホンニベは稀な大きさといえる。出土したホンニベの耳石長の平均は24mm程度で、これに近い大きさの個体が約90点出土しており、耳石総数の8.9%を占める。魚体の大きさが比較的揃っていることから、産卵期に河口に集まってきた個体を狙って漁獲していたと考えられる。 これまでに同定した東名遺跡群出土の魚骨ではニベ科は少なかったが、今回、耳石ではニベ科が多数出土していることが明らかとなり、また現在の有明海に生息しないホンニベを同定できたことは、当時の漁労の実相に迫るだけでなく、有明海の古環境を復元する資料としても重要である。		
【実績値】	魚種同定点数：500点		
【受託経費】	435千円		



ホンニベ(Miichthys miiuy)の耳石

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8028

業務実績書(受託事業)

研No.37-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	水浸した日本画の修復方法に関する調査研究(受託)((3)ー④)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 早川泰弘(分析科学研究室長)、早川典子(主任研究員)、山田祐子(文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー)、楠京子(アソシエイトフェロー)			
【年度実績概要】 本調査研究は、東日本大震災において水浸した日本画について、過去の修理において通常の伝統的材料とは異なる接着剤が使用されているものが発見されたため、当研究所が茨城県鹿嶋市との契約を結び、再現実験や劣化の分析を行い、適切な処置方法の検討を行おうとするものである。 昨年度、対象作品である両界曼荼羅図について、旧総裏紙を接着している接着剤を分析し、ポリエチレンー酢酸ビニルの共重合体であることを確認している。この材料はシクロヘキサンを使用することで剥離可能なことも確認できている。本年度は、総裏を除去した場合に残る肌裏紙について検討した。 この肌裏紙は旧修理時には打ち替えていないため、劣化した澱粉糊と思われる接着剤により辛うじて接着されている現状であることが確認された。この肌裏紙を除去するか否か、また除去する方法について本年度、調査を行いつつ検討した。 その結果、肌裏紙を除去した上で、本紙の本格修理を行うことを決定した。 具体的な作業は、顔料の剥落どめを行った後に水によるクリーニングをし、肌裏紙の除去を行うもので、作業者に対する適切な助言を行った。			
			
水によるクリーニング作業			
【実績値】			
【受託経費】 300 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8029

業務実績書(受託事業)

研No.37-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	文化財（美術工芸品）等緊急保全活動・現況調査事業（受託）（（3）－④）		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 山梨絵美子（企画情報部副部長）、佐野千絵（保存科学研究室長）、森井順之（主任研究員）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）、二神葉子（企画情報部情報システム研究室長）、皿井舞（主任研究員）、菊池理予（無形文化遺産部研究員）、今石みぎわ（研究員）			
【年度実績概要】 本調査研究は、文化庁からの受託事業である。25年度、26年度の2カ年間で実施される。 23年3月に発生した東日本大震災を受け、被災各地で行われた被災文化財等の緊急保全活動について全容を把握し、今後予想される大災害等が発生した際の初動対応等の指針を策定する際に提供できるよう情報整理を行った。主な事業としては、①東日本大震災を受けて実施された文化財（美術工芸品）等の緊急保全活動の実績のとりまとめ、②①の活動により緊急保全された文化財等の保管状況や修復状況の調査、③全国組織の文化財・美術等関係団体、地域の資料保全に関わる団体等の災害に対する対応策の現状調査、から成る。 ① 文化庁による文化財レスキュー事業の2年間の活動において救援委員会が作成・集積した資料の整理・分析 今年度は活動日報（全914件）及び写真（26,933件）の情報整理を行った。活動日報については、対象となる施設、被災資料分類など項目を新たに設けることで、ある対象施設において必要な人員、時間、物資についてデータベースから分析可能となるようにした。また、写真ファイルにも位置情報などを付加することで、活動日報データベースと情報共有ができるようにした。また、村井源氏（東京工業大学）の協力を得て、活動日報データベースのビッグデータ解析に着手した。また、総合博物館（大規模館）、地域の歴史資料館（小規模館）のモデルケースを作成し、津波被災による被害状況、および救援活動に必要な人員・時間・物資等の解析を行った。 ② 文化財レスキュー事業により緊急保全された文化財等の保管状況や修復状況に関する調査 今年度は福島県浜通りにおける救援活動が行われ、一時保管場所となる旧相馬女子高等学校における保存環境について指導助言を行った。また、宮城県石巻文化センター被災資料の一時保管施設となっている旧石巻市立湊第二小学校の保存環境に関する調査を実施した。 ③ 災害時の対応策についての調査 本調査については第2年次に実施予定であるが、進めるうえでの情報収集を開始した。			
			
石巻文化センター被災文化財一時保管施設の環境調査			
【実績値】 受託研究報告書「文化財（美術工芸品）等緊急保全活動・現況調査事業報告書」 26.3 1件			
【受託経費】 3,412 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8030

業務実績書(受託事業)

研No.39-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	絵金屏風の保存修理に関する調査研究(受託)((3)－⑤)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 朽津信明(修復材料研究室長)、早川典子(主任研究員)、川野邊渉(文化遺産国際協力センター長)、山田祐子(アソシエイトフェロー)、楠京子(アソシエイトフェロー)、			
【年度実績概要】 燻蒸事故により汚損された絵画の保存修復に関係して、調査研究を行った。 これは、通常の汚損事故とは異なり、燻蒸薬剤による化学反応で作品に使われていた色料が変色・変化をした状態で、作品のみならず作業者の安全を図るため、当研究所が事故当事者である熊本市現代美術館との契約において実施するもので、この結果をもとに修理技術者が慎重な作業を行っている。 概要は以下の項目である。 (1) クリーニング手法の研究と、今後の顔料の変化に関する分析研究 エメラルドグリーンが使用されていた部分については、サクシオンテーブルを用いて一部分ずつ吸引濾過を行いながら水による洗浄をすることで、絵画に付着した汚れ物質を除去した。洗浄に使用した水のpHを測定しつつ行い、pHが中性になる時点を洗浄終了の目安とした。 この作業の終了後にイオン交換水を噴霧器で噴霧し、作品の下に敷いた吸取紙に吸い取り、全体のクリーニングとした。 (2) 高精細画像の撮影 クリーニング作業終了後に企画情報部写真室により対象作品の高精細画像を撮影した。 (3) 株式会社修護により行われている保存修理への指導助言 上記クリーニング作業に関する調査を行い、作業方法の提案を行った。また、クリーニング終了後の肌裏の除去時に、汚損物質による肌裏紙の固着が見られたため、その部分の元素分析を行った。  クリーニング作業を終了し、pH調整後の裏打ち作業			
【実績値】			
【受託経費】 199 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8031

業務実績書(受託事業)

研No.39-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	松平定信<細写 物語歌書『源氏物語』>の収蔵箱の保存に関する調査研究(受託)((3)-(5))		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存科学研究室長 佐野千絵
【スタッフ】 山下好彦(文化遺産国際協力センター任期付研究員)、石井美恵(客員研究員・染織品修復家)			
【年度実績概要】 松平定信<細写 物語歌書『源氏物語』>収蔵箱の装飾技法と構造に関する調査及びその修復処置に関する技法的研究を進めるため、桑名市博物館からの受託調査研究を受け入れた。 収蔵箱は背面に蝶番を打ち、観音開きになる形式で、内部に棚を設ける。棚の上には歌書を引き出すための引手のついた台をそれぞれの段に置く。棚の表面に格子状の枠を設けて紗を貼り、周囲に金紙を廻す。正面には裏側に裏箔した鼈甲を貼り、月型の彫金を取り付ける。素地は鉄刀木製の指物造りで、さくらの花を木地蒔絵する。正面には留金具、天板には提金具、箱の角に隅金具を打つ。 現状は、木地の収縮により木地接合部が外れ段差ができていた。また、木地表面に数か所亀裂があり、大きいところでは幅2〜3ミリ程度の割れが認められた。鼈甲は著しく剥離し、彫金も一部で外れていた。蝶番部分には後世修理と考えられる釘が打たれ、鼈甲は合成樹脂で接着されていると考えられる。棚の前面の銀糸を織り込んだ紫絹紗を張った内扉については、片側の絹紗(A)は一部裂けているが残っているものの、もう片方の絹紗(B)は棧にわずかに糸を残すのみでほとんど失われていた。 修復方針としては、木工、漆工部分は現状維持修理を基本とし、展示効果を考えて木地割れや亀裂部分は充填後に色調整を行った。また蝶番取り外しの際に、後世修理の釘等で損傷などの問題が生じた場合は釘を復元した。染織部については、絹紗(A)の欠損が広がらないように補修した。絹紗(B)は蒔絵箱を開いて展示するには見栄えが悪く、現状では残糸がさらに失われる可能性が高いため絹紗(A)に類似した布を復元し、残糸をそこに補強したうえで張り込んだ(見た目は復元されるが、技法と素材を変えることで後補であることが分かるようにした)。			
			
刺繍部分の目視調査と打ち合わせ			
【実績値】 修理件数 1件			
【受託経費】 539千円			

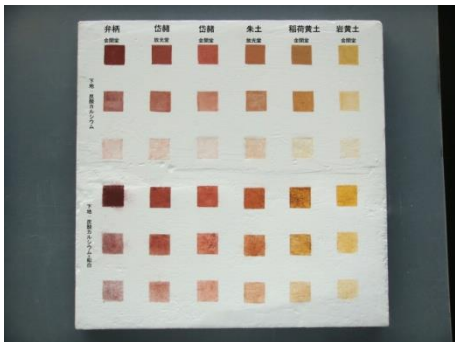
【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8032

業務実績書(受託事業)

研No.42-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務(受託)((4)-①)		
【担当部課】	保存修復科学センター 文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 佐野千絵(保存修復科学センター保存科学研究室長)、木川りか(生物科学研究室長)、早川泰弘(分析科学研究室長)、朽津信明(修復材料研究室長)、北野信彦(伝統技術研究室長)、吉田直人(主任研究員)、犬塚将英(主任研究員)、佐藤嘉則(研究員)、早川典子(主任研究員)、森井順之(主任研究員)、酒井清文(客員研究員)、川野邊渉(文化遺産国際協力センター長)、加藤雅人(主任研究員)、山田祐子(アソシエイトフェロー)、楠京子(アソシエイトフェロー)、大河原典子(客員研究員、日本画家)、前川佳文(客員研究員、壁画保存修復士) 【年度実績概要】 ○生物及び環境関連研究 - 高松塚壁画修理施設の修理作業室等において、定期的に害虫トラップを設置し、浮遊菌調査を実施し、環境の清浄度を確認するモニタリングを継続実施している。修理作業室とそれ以外の修理施設内各所における温湿度の測定も継続して行っている。昨年度、作業室で再びチャタテムシが捕獲されたことから、チャタテムシに関する詳細な調査を実施するとともに、温湿度状況との関連を検討した。25年8月までは施設内の湿度が高かったが、25年8月の空調機のメンテナンスを経て、この湿度上昇の問題が解消されたことを確認した。 - 茨城県ひたちなか市虎塚古墳で、石材表面に発生した微生物バイオフィルムの解析とUV照射による除去方法の検討を行った。 - 福岡県うきは市珍敷塚古墳および日岡古墳で装飾古墳の保存環境調査を継続実施した。珍敷塚古墳では保存庫内の温湿度計測を継続するとともに、うきは市が定期的実施するモニタリングへ指導助言を行った。日岡古墳では、冬季に発生する保存施設の内壁の結露への対策を講じるため、保存施設の壁面温度の計測を行った。 ○修復関連研究 - 高松塚古墳壁画のクリーニング方法として、以前より行ってきた紫外線照射に加えて酵素を利用した除去方法について検討した。バイオフィルムの分解を目的として酵素を利用するための準備作業として、漆喰や顔料、また修復材料に対する酵素の影響評価を行い、顔料等の色みに変化がないことを確認した。また、酵素を使用する場合の修復材料を選択し、実際の修復処置に適用した。 - 高松塚古墳壁画に使用されている石灰漆喰を、石材への密着性や強度、現実的な施工手順といった面から捉え、材料の特定や調合分量を考慮したうえでの再現を目指した研究を行なった。日本国内において、石灰漆喰が残存する装飾古墳を視察した。石槨内に残る漆喰片の残留状態や残存箇所、またそれらを取り巻く保存環境に着目し、本研究の参考資料とした。現在の左官技術者の協力を得て、現地調査を行い、石灰漆喰への粘材及び骨材の有無による乾燥後の状態観察、石質板支持体を用いた場合の密着強度への影響などについての確認も行った。 ○材料技法研究 - 奈良文化財研究所との共同により、高松塚古墳壁画に対する可視近赤外分光光度計・蛍光X線分析装置による顔料の分析調査、及びマクロ撮影による状態調査を実施した。 濃度の差異による可視光や蛍光X線の検出感度を検討した。			
			
高松塚古墳壁画人物群像の衣部分に使われている赤色、黄色に関する基礎実験用色材試料			
【実績値】			
【受託経費】			
4,287 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8033

業務実績書(受託事業)

研No.42-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存対策等調査(受託)((4)－①)		
【担当部課】	保存修復科学センター 文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 佐野千絵(保存修復科学センター保存科学研究室長)、木川りか(生物科学研究室長)、早川泰弘(分析科学研究室長)、朽津信明(修復材料研究室長)、北野信彦(伝統技術研究室長)、吉田直人(主任研究員)、犬塚将英(主任研究員)、佐藤嘉則(研究員)、早川典子(主任研究員)、森井順之(主任研究員)、川野邊渉(文化遺産国際協力センター長)、加藤雅人(主任研究員)、山田祐子(アソシエイトフェロー)、楠京子(アソシエイトフェロー)、大河原典子(客員研究員、日本画家)、前川佳文(客員研究員、壁画保存修復士) 【年度実績概要】 ○生物環境関連研究 25年9月下旬のキトラ古墳の整備作業開始までの間、古墳石室内、小前室の点検を継続し(奈良文化財研究所が現地で担当)、温湿度の計測、及び古墳周辺の気象観測を実施して、観測データのバックアップを取り、管理の体制を敷いた。 - 施設の埋め戻しに先立って、石室内に設置した気象観測装置等の撤収作業を行った。 25年2月に実施されたキトラ古墳盗掘口のステンレス台取り外しに伴い、盗掘口、閉塞石の微生物サンプルを採取し、菌叢を調査する目的で微生物分離とその同定及び分離株のアンプリ作成を実施した。 ○修復関連研究 - 漆喰の再構成を行うために、充填材や接着剤の適用方法を検討した。また、再構成にあたって構成後の表面高さ等の作成方法についても複数の材料と工法を検討し、文化庁及び修復技術者(国宝修理装こう師連盟)と協議した。 - 現状のキトラ古墳壁画の漆喰を、石材への密着性や強度、現実的な施工手順といった面から捉え、材料の特定や調合分量を考慮したうえでの再現研究を行った。この調査は、高松塚古墳の漆喰研究と関連づけながら遂行した。 - キトラ古墳壁画の四神及び十二支について、描かれている絵画を修復時に正確に認識するために、線起こし図の作成を行った。 ○材料技法研究 - 奈良文化財研究所との共同により、キトラ古墳壁画に対する可視近赤外分光光度計・蛍光X線分析装置による顔料の分析調査、及びマクロ撮影による状態調査を実施した。			
 天井再構成の作業			
【実績値】			
【受託経費】			
34,514 千円			

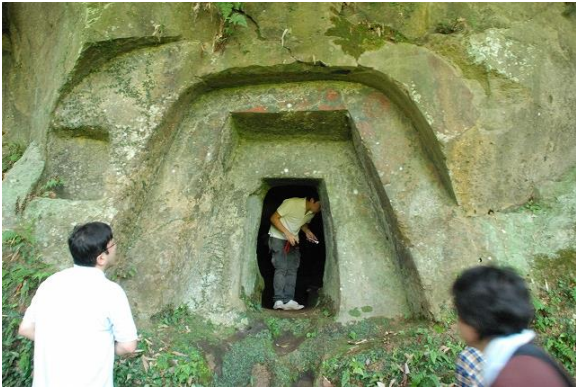
【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8034

業務実績書(受託事業)

研No.42-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	装飾古墳の保存に関する調査研究事業(受託)((4)-①)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 木川りか(生物科学研究室長)、犬塚将英(主任研究員)、佐藤嘉則(研究員)、朽津信明(修復材料研究室長)、森井順之(主任研究員)			
【年度実績概要】 本調査研究は、文化庁からの25年度受託事業として実施したものである。 古墳壁画の保存活用に関する検討会に設けられた装飾古墳ワーキンググループにおいて、装飾古墳の保存活用の在り方やその方針を検討するに当たって必要となる技術的な調査を行った。 装飾古墳の保存状態は、古墳の特性や管理状況に応じて様々であり、装飾部分の劣化の態様も様々である。本事業において、将来にわたる装飾古墳の保存管理の在り方や保存活用の方針を検討するために必要となる情報を整理し、また必要に応じて現地調査を実施し、それらの調査結果をまとめて資料を提供した。なお、墳丘形状や土質の問題等、考古学的な性格の強い項目は奈良文化財研究所へ再委託を行った。 本受託研究では、特に「保存管理、保存活用」という観点から装飾古墳のおかれている全体像の把握を目指すことを目的とし、「外部空間に装飾があるもの」「内部空間に装飾があるもの」「本来の位置から移設された博物館環境下で保存されているもの」「埋戻しされたもの」とカテゴリーを分けて調査を進めた。また調査では、(1)これまでの文献や資料等に基づく体系的な調査、(2)装飾古墳の今後の保存活用を考えるうえで重要と考えられる現場の調査、の2つを実施した。 (1)これまでの文献や資料等に基づく体系的な調査 古墳や装飾に関するこれまでの調査結果(公表された文献や資料)を整理し、装飾古墳の保存活用に関する情報の体系的な調査を行った。墳丘や石室など史跡整備報告書の図面等のデジタルデータ化を行うとともに、古墳環境に近い環境にある海外の遺跡について生物被害やその対策に関する情報収集を行った。 (2)装飾古墳の今後の保存活用を考えるうえで重要と考えられる現場の調査 装飾古墳の保存整備に関する現地視察・聞き取り調査を、福岡県、熊本県、福島県、奈良県、大阪府、岡山県にて行った。特に福岡県内にある石人山古墳では、墳頂部に覆屋内展示されている石棺を対象に温湿度・照度の連続計測、石材水分量の調査や着生生物の分布調査、周辺部の三次元形状計測を実施し、装飾古墳の保存上の問題点の把握を行った。			
			
石人山古墳石棺の着生生物分布調査(色差計測)		外部空間に装飾がある事例の現地視察(石貫ナギノ横穴群)	
【実績値】 受託事業報告書 1件 ①装飾古墳の保存に関する調査研究事業報告書 26.2. 発表等 1件 ② 岡田健:装飾古墳の保存に関する調査研究事業について、第10回古墳壁画の保存活用に関する検討会装飾古墳ワーキンググループ 26.1.31			
【受託経費】 12,000千円			

【受託】
(様式3)

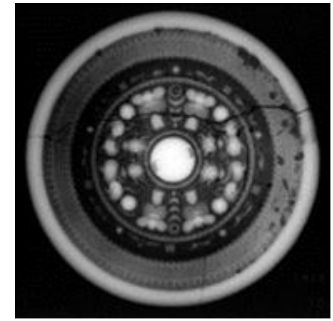
施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8035

業務実績書(受託事業)

研No.43-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	大阪府安満宮山古墳出土品保存修理事業(受託) (4) - ①		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎、田村朋美（保存修復科学研究室研究員）			
【年度実績概要】 本事業の対象は安満宮山古墳出土の青銅鏡、ガラス小玉、苧麻布及び板状鉄斧である。 青銅鏡は出土直後に保存処理が行われており、比較的安定した状態を保っているが、保存処理後10年以上が経過しているため、本事業では、詳細な状態調査（写真撮影、肉眼観察、顕微鏡観察、X線ラジオグラフィ）を行い、劣化が進行していないことを確認した。保存修理事業と並行して、保存修理後も低湿度環境下で保管ならびに展示に用いることのできる安定台を作製した。 ガラス小玉は、ほとんどが完形品で比較的保存状態は良好であるが、二片以上に細片化しているものが90点ある。これらの破片資料は脆弱であり、わずかな衝撃によってさらに細片化する危険性を有しているため、物理的な衝撃でこれ以上細片化することのないように強化処置を施し、接合可能なものについてはアクリル樹脂を用いて接合した。保存修理事業と並行して、収蔵・保管中の物理的衝撃による破損を防ぎ、安定した収蔵・展示環境を実現するための保管台座を作成した。 苧麻布は、水を含んだ状態のままガラス板にはさまれており、展示・保管が困難な状態であった。また、水を含んだ状態のため、保管中の腐朽や乾燥によって外形を損傷する危険性を有していた。そこで、適当な強度と柔軟性を与えるため、水溶性ポリマー（商品名：ポリオックスTM）を含浸したうえで、真空凍結乾燥法により乾燥状態に移行させた。保存修理の一環として、収蔵及び展示に用いることのできる保管台座を作成した。 板状鉄斧は、低湿度環境下で問題が生じないことを確認したのち、アクリル樹脂を用いて接合した。さらに、隙間や欠損部が生じている部分に対しては、エポキシ樹脂（フェノールマイクロバルーンをエポキシ樹脂（商品名：アラルダイトラピッド）に所定量混合したもの）を充填した。			
【実績値】 実施報告書：1件 『平成25年度 重要文化財大阪府安満宮山古墳出土品保存修理報告書』2014.3 保存修理点数：8点			
【受託経費】 2,994千円			



青銅鏡の状態調査
(X線ラジオグラフィ)

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8036

業務実績書(受託事業)

研No.43-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務(受託)(4)－①		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 廣瀬 覚、青木 敬、降幡順子、若杉智宏、荒田敬介、南部裕樹(以上、都城発掘調査部)、辻本与志一、脇谷草一郎、高妻洋成、田村朋美、赤田昌倫(以上、埋蔵文化財センター)、井上直夫、栗山雅夫(以上、企画調整部)、肥塚隆保(元副所長、客員研究員)、石崎武志、早川泰典、吉田直人、佐野千絵、三浦定俊(以上、東京文化財研究所)、青柳泰介、水野敏典(奈良県立橿原考古学研究所)、岡林孝作(奈良県教育委員会)、相原嘉之(明日香村教育委員会)			
【年度実績概要】 ・キトラ古墳では、墳丘整備にむけた墓道部の最終的な考古学的調査として、3次元レーザー測量、写真撮影、版築土層剥ぎ取り作業などを実施した。 ・保存施設の記録として、覆い屋内外の3次元レーザー測量を実施した。 ・覆い屋の解体作業に先立ち、墓道部分の埋め戻し作業を実施した。 ・2週間に1回、研究員による古墳石室内等のカビ点検作業を実施した。緊急時には現地において応急的な処置にあたり、文化庁に状況を報告した。 ・報告書未掲載資料の歯牙及び人骨片87箱のうち、24箱分について強化処置及び仮保管ケースを作成した。 ・壁画の保存修復に資する情報を得るために、蛍光X線分析を用いた壁画の材料調査、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像、THz波を用いた漆喰層調査、分光分析による顔料交差などを実施した。 ・高松塚古墳壁画修理施設の公開と同時に実施された25年8月の石室一般公開に際しては、解説員として研究員(延べ13人)を派遣した。			
			
土層剥ぎ取り作業			
【実績値】 論文等2件、発表等3件 ・福永香・高妻洋成・W. Zia・T. Meldrum・B. Bluemich「テラヘルツ波および核磁気共鳴法による壁画の構造調査」文化財保存修復学会第35回大会 ・赤田昌倫・吉田直人・高妻洋成・降幡順子・脇谷草一郎・田村朋美・辻本与志一・岡田健・朽津信明・江村知子・早川典子・宇田川滋正・建石徹「キトラ古墳壁画の材料調査 2-玄武像の可視分光分析調査-」日本文化財科学会第30回大会 ・奈良文化財研究所ほか「特別史跡キトラ古墳の調査(飛鳥藤原第178-6次)記者発表資料」2013.12.5 ・若杉智宏「キトラ古墳の調査」『奈文研ニュース』No.49、2013.6 ・玉田芳英「キトラ古墳との30年」『奈文研ニュース』No.51、2013.12 記録作成数 写真(デジタル)131枚			
【受託経費】 37,896千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8037

業務実績書(受託事業)

研No.43-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務(受託)((4)-①)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 廣瀬 覚、青木 敬、降幡順子、若杉智宏、荒田敬介、南部裕樹(以上、都城発掘調査部)、辻本与志一、脇谷草一郎、高妻洋成、田村朋美、赤田昌倫(以上、埋蔵文化財センター)、井上直夫、栗山雅夫(以上、企画調整部)、肥塚隆保(元副所長、客員研究員)、石崎武志、早川泰典、吉田直人、佐野千絵、三浦定俊(以上、東京文化財研究所)、青柳泰介、水野敏典(奈良県立橿原考古学研究所)、岡林孝作(奈良県教育委員会)、相原嘉之(明日香村教育委員会)			
【年度実績概要】 ・石室解体に伴う発掘調査成果の活用にかかる事業として、石室周囲の版築層の剥ぎ取りパネルを展示公開資料として再加工した。剥ぎ取りパネルを展示空間に沿った形状、大きさに整えるとともに、パネル内に石室空間を擬似的に表現し、見学者にわかりやすい形に仕上げた。完成したパネルは飛鳥資料館の古墳コーナーに設置した。 ・同じく石室解体に伴う発掘調査成果の整理・活用にかかる事業として、古墳構築過程、石室解体作業の3次元アニメーション、及びそのモデル作成を行った。今年度は、昨年度短編が完成したことを受けて、長編作成作業に着手した。必要となるモデルを追加作成するとともに、古墳構築過程に関しては長編アニメーションを完成させることができた。 ・壁画の保存修復(劣化原因)について、蛍光X線分析による壁画の材料調査、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像、分光分析による顔料調査などを実施した。 ・25年8月・26年1月の高松塚古墳壁画修理施設の一般公開に際して、解説員として研究員(延べ21人)を派遣した。			
			
版築層の剥ぎ取りパネルの設置風景			
【実績値】 論文等1件、発表等2件 ・福永香・高妻洋成・W. Zia・T. Meldrum・B. Bluemich「テラヘルツ波および核磁気共鳴法による壁画の構造調査」文化財保存修復学会第35回大会 ・降幡順子・早川泰弘・辻本与志一・赤田昌倫・脇谷草一郎・田村朋美・高妻洋成・肥塚隆保・吉田直人・朽津信明・早川典子・江村知子・佐野千絵・岡田健・三浦定俊・宇田川滋正・建石徹「高松塚古墳壁画の材料調査-蛍光X線分析法による下地漆喰に関する調査(5)-」日本文化財科学会第30回大会 ・赤田昌倫「高松塚古墳壁画の色彩に関する材料調査報告～東壁西壁の女子群像における赤色と黄色の可視分光分析から～」『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6			
【受託経費】 53,977千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8038

業務実績書(受託事業)

研No.43-4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	装飾古墳の保存に関する調査研究事業－考古学的見地にもとづく調査研究－（受託）（(4)－①）		
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 廣瀬 覚、青木 敬、降幡順子、若杉智宏、荒田敬介、南部裕樹（以上、都城発掘調査部（飛鳥藤原地区））、辻本与志一、脇谷草一郎、高妻洋成、田村朋美、赤田昌倫（以上、埋蔵文化財センター）、井上直夫、栗山雅夫（以上、企画調整部）、肥塚隆保（客員研究員 元副所長）、石崎武志、早川泰典、吉田直人、佐野千絵、三浦定俊（以上、東京文化財研究所）、青柳泰介、水野敏典（奈良県立橿原考古学研究所）、岡林孝作（奈良県教育委員会）、相原嘉之（明日香村教育委員会）			
【年度実績概要】 ・装飾古墳の保存・管理の現状を把握するため、奈良文化財研究所が所蔵する装飾古墳の調査・保存整備に関連する報告書類の文献調査を実施した。 (1) 福岡県、熊本県、福島県内の装飾古墳保存管理状況の現地調査（とりわけ福岡県石人山古墳では装飾を有する石棺・石人、及びその保護施設に対する3Dレーザ測量調査） (2) 奈良文化財研究所所蔵の装飾古墳に関する文献調査 ・整備・保存管理状況に関する図面集成 ・基本となる関連文研のPDF化作業 を実施し、適宜、情報を東文研・文化庁と共有するとともに、最終的に成果を東京文化財研究所編『装飾古墳の保存に関する調査研究事業報告書』にまとめた。 また、成果の一部は、文化庁編『古墳壁画の保存活用に関する検討会装飾古墳ワーキンググループ報告書』にも掲載した。  石人山古墳3D測量の作業風景			
【実績値】 報告書等 1 件：文化庁編『古墳壁画の保存活用に関する検討会装飾古墳ワーキンググループ報告書』2014. 3			
【受託経費】 4,950 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8039

業務実績書(受託事業)

研No.44-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	甘樫丘地区遺跡発掘調査業務(受託)((4)-②)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 清野孝之(考古第三研究室長)、今井晃樹、山本崇、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、大林潤・前川歩(遺構研究室研究員)、和田一之輔(考古第一研究室研究員)、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、荒田敬介(考古第二研究室アソシエイトフェロー)、山野ケン陽次郎(前考古第一研究室アソシエイトフェロー)、中村一郎(写真室主任)、栗山雅夫(写真室技術職員)、井上直夫(写真室再雇用職員)			
【年度実績概要】 甘樫丘は、飛鳥川の西岸に位置する標高 145m ほどの丘陵で、多数の谷が入り込む複雑な地形を呈している。『日本書紀』には、皇極天皇 3 年(644)に蘇我蝦夷・入鹿親子の邸宅が甘樫丘に営まれたことが記されている。今回の調査は、国営飛鳥歴史公園甘樫丘地区の整備に伴うもので、平成 23 年度まで継続的に調査を行ってきた谷の北に位置する。調査地は、A～C 区の 3 ヶ所を設定した。A 区は丘陵の尾根上、B 区はその東に降る斜面、C 区はさらに東で南東に開く谷に位置する。調査は平成 24 年度に着手し A 区・B 区の調査は、25 年 1 月 17 日に終了した。C 区は 24 年 3 月で中断していたが、25 年 6 月より作業を再開し、25 年 10 月 4 日に調査終了、25 年 12 月 6 日に埋戻しを完了した。調査面積は 803 m ² である。 調査の結果、谷の斜面を切土・盛土し、平坦面を造成していたことが明らかとなった。調査区西半では、斜面地を谷の地形に合わせて地山を削り、高低差約 2m の上下 2 段の段を造り出す。上段の平坦面は、南半は幅 2～3m で、北に向かって広がる。下段は、切土に加え、谷の低い部分を埋め立てることによって、東西 20m 以上、南北 30m 以上の広い平坦面を造り出している。谷の埋立土は、出土する遺物が 7 世紀前半から中頃までにほぼまとまること、厚い単位で斜めに堆積していること、平坦な整地面などが確認されないことなどから、埋め立ては一気に行われたとみられる。 検出遺構は、建物 2 棟、溝 1 条、炭溜 3 基、土坑群などである。このうち調査区北部中央で検出した建物は、東西 3 間、南北 3 間の総柱建物で、柱間寸法は 1.5m、北側と南側の 1 間は 1.2m である。 これらの結果より、調査地が存在する谷は、平成 23 年度まで継続して調査を行ってきた南の谷より面積が狭いが、同様に切土・盛土などの造成を行い、様々な施設を造り活発に利用していたことが明らかとなった。また、7 世紀代の甘樫丘は、広範囲にわたって大規模な造成を伴う開発がなされていた可能性がより強くなった。			
			
検出した総柱建物(北から)			
【実績値】 論文等数 : 2 件 大林潤「甘樫丘東麓遺跡の調査(飛鳥藤原第 177 次)」『奈文研ニュース』No. 51 2013. 12 大林潤他「甘樫丘東麓遺跡の調査ー飛鳥藤原第 177 次」『奈良文化財研究所紀要 2014』2014. 6 (予定) 報道発表数: 1 件 奈良文化財研究所都城発掘調査部「甘樫丘東麓遺跡の調査(飛鳥藤原第 177 次)記者発表資料」2013. 9. 5 現地説明会: 1 件 奈良文化財研究所都城発掘調査部「甘樫丘東麓遺跡 飛鳥藤原第 177 次現地見学会資料」2013. 9. 7 出土遺物(参考値) 軒瓦 2 点、丸平瓦 1 箱分、土器 33 箱分、木器・木製品 1 箱分、金属製品 2 点、その他獣骨 16 点、 壁土・高師小僧 1 箱、炭化物 1 箱、種実 1 箱。 記録作成数 遺構実測図 62 枚、写真(4×5) 92 枚、デジタル写真 241 枚			
【受託経費】 16,616 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8040

業務実績書(受託事業)

研No.44-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	キトラ古墳周辺地区檜隈寺跡周辺遺跡発掘調査業務 (受託) ((4)-②)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 黒坂貴裕(都城発掘調査部主任研究員)、森先一貴(考古第三研究室研究員)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)			
【年度実績概要】 本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部の丘陵上に位置し、この丘陵上には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が所在する。今年度は、檜隈寺中心伽藍跡の南東方向で擁壁工事計画に先立ち、昨年度の調査で素掘溝を確認していた丘陵の南東裾部分について調査を実施した。調査期間は26年1月9日より開始し同年3月17日に終了した。発掘調査面積は280㎡。 調査地 : 檜隈寺の塔の南北軸線上にあたる位置(A区)と回廊東南隅(B区) 調査期間: 26年1月9日～3月17日 調査面積: 295㎡ 調査成果: A区 古代と推定される掘立柱建物2棟、中世の掘立柱建物1棟、掘立柱塀1基、溝2条、土坑2基 古代と推定される掘立柱建物は中心伽藍の建物の方位の振れと一致する。 B区 掘立柱建物3棟、土坑4基、溝2条 いずれも中世の遺構と考えられる。 出土遺物: 瓦、土器、金属製品などがある。			
			
A区の遺構検出状況			
【実績値】 (参考値) 出土遺物 軒瓦42点、丸平瓦109箱、土器5箱、鉄製品(鉄釘・鉄鎌・唐須など)6点 記録作成数 遺構実測図26枚、写真(4×5)64枚、デジタル写真90枚、デジタルメモ写真367枚			
【受託経費】 3,203千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8041

業務実績書(受託事業)

研No.45-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	大和紀伊平野農業水利事業に係る埋蔵文化財発掘調査(受託)((4)―③)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 清野孝之(都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)室長)、大林潤、若杉智宏、前川歩(以上、同部研究員)、山野ケン陽次郎、(前考古第一研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫、栗山雅夫(以上、企画調整部技術職員)			
【年度実績概要】 調査地は藤原京右京七条一坊及び藤原宮外周帯にあたる。調査区は、幅約1.5m(一部2.4m)、南北約110mで、調査面積は182㎡である。発掘調査期間は25年8月5日～9月13日である。 今回の調査で検出した主な遺構は、東西溝4条、南北溝1条である。 調査区中央付近では東西溝を2条確認した。2条のうち、南側の溝は、飛鳥藤原第63次調査で確認した東西溝SD6510から西に3mの位置にあたり、SD6510の延長部の可能性がある。北側の溝は、その位置関係から、六条大路の南側溝である可能性が高い。 調査区北側では東西溝を2条確認した。位置関係や溝の大きさから、2条のうちどちらかが、六条大路の北側溝であると考えられる。 調査区北側では南北溝を1条確認した。北でやや東にふる直線的にのびる溝で、南北30mにわたり検出した。検出位置は、西一坊大路東側溝の想定位置とほぼ一致しており、この南北溝は、西一坊大路東側溝の可能性が高い。 本事業は、水路付け替え工事に伴う発掘調査で、狭隘な調査範囲ではあったが、上記のように埋蔵文化財に関する情報を最大限に引き出し、必要となる記録類の作成を迅速に進めることができた。 なお、調査終了後も調査地外の水路改修工事区域の立会を実施し、遺構状況の確認を行った。			
 			
調査区北側 完掘状況(北から) 調査区中央付近 完掘状況(南から)			
【実績値】 論文等 若杉智宏「藤原京右京七条一坊の調査(飛鳥藤原第178-2次)」『奈文研ニュース』No.51、2013.12 奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原京右京七条一坊の調査(飛鳥藤原第178-2次)」『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6(予定) 出土遺物：土器・土製品3箱、軒瓦3点、丸平瓦2箱、銅銭1点 記録作成数：遺構実測図19枚、写真(4×5)8枚、デジタル写真90枚			
【受託経費】 1,968千円			

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力コンソーシアム事業(受託)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】 原本知実(アソシエイトフェロー)、原田怜(アソシエイトフェロー)、宮崎彩(アソシエイトフェロー)、井内千紗(アソシエイトフェロー)、草薙綾(研究補佐員)、降旗翔(研究補佐員)、中山仁美(事務補佐員)、川嶋陶子(事務補佐員)、長谷川泉(事務補佐員)、後藤多聞(客員研究員)			
【年度実績概要】 文化遺産国際協力に係わる諸課題について議論するための分科会を14回、ワーキンググループ会合を2回開催すると共に、会員間の情報共有を促進するための場として研究会を2回開催した。コンソーシアム活動を広報するために、25年10月には、一般市民向けの公開シンポジウムを行ったほか、国際協力事業を紹介する冊子の作成、公式ウェブサイトのデータ追加を行った。さらに、フィリピン、スリランカ、バーレーン等への協力支援を実施した。 (1) コンソーシアムの企画・運営 - 運営委員会を2回開催して、活動方針等を協議したほか、26年3月には研究会と併せて総会を開催した。 - 企画分科会、東南アジア分科会、西アジア分科会、東アジア・中央アジア分科会、欧州分科会、アフリカ分科会、中南米文化会を計14回開催した。 - ミャンマーワーキンググループ会合を2回開催した。 - 広報活動のため、事業紹介冊子の作成、基本方針冊子の作成、一般向けウェブサイトのデータ追加を行った。 (2) 情報共有と情報発信 - シンポジウム「世界遺産シンポジウム 世界遺産の未来—文化遺産の保護と日本の国際協力」を開催した。 - 研究会「文化遺産保護の新たな担い手—多様化するニーズへの挑戦」、「文化遺産保存の国際動向」を開催した。 - 報告書『平成24年度協力相手国調査 フィリピン』をまとめた。 - 報告書『平成24年度協力相手国調査 スリランカ』をまとめた。 - 報告書『ブルーシールドと文化財緊急活動—国内委員会の役割 研究会報告書』をまとめた。 - 報告書『世界遺産シンポジウム 世界遺産の未来—文化遺産の保護と日本の国際協力 シンポジウム報告書』をまとめた。 (3) 文化遺産国際協力に関すること - フィリピン、スリランカ、バーレーンに対して文化遺産保護状況に関する事業の支援を行った。 - 第37回世界遺産委員会に出席し情報収集を行った。 - 世界文化フォーラムに出席し情報収集を行った。			
 シンポジウム「世界遺産シンポジウム 世界遺産の未来—文化遺産の保護と日本の国際協力」 平成25年10月26日撮影			
【実績値】 運営委員会の開催：2回、総会の開催：1回、シンポジウムの開催：1回、分科会の開催：(企画分科会5回、東南アジア分科会2回、東・中央アジア分科会2回、西アジア分科会2回、欧州分科会1回、アフリカ分科会1回、中南米分科会1回)合計14回、ワーキンググループ会合の開催：2回、研究会の開催：2回、フィリピンの文化遺産保護国際協力支援、スリランカの文化遺産保護国際協力支援、バーレーンの文化遺産保護国際協力支援、文化遺産保護関係国際機関情報収集：第37回世界遺産委員会参加、世界文化フォーラム参加 (成果物ドキュメント名) ①報告書『平成24年度協力相手国調査 フィリピン調査報告書 日本語』2014.3 300部 ②報告書『ブルーシールドと文化財緊急活動—国内委員会の役割 研究会報告書』2014.3 190部③「世界遺産シンポジウム 世界遺産の未来—文化遺産の保護と日本の国際協力 シンポジウム報告書」2014.2 500部④「文化遺産国際協力事業紹介2013年度」2014.3月 2500部⑤「文化遺産国際協力事業紹介2013年度 英語」2014.3 2500部⑥「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の推進に関する基本的な方針」2014.3 3000部			
【受託経費】43,674千円			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8043

業務実績書(受託事業)

研No.46-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	第37回世界遺産委員会における審議資産概要一覧表の作成(受託)((1)-①)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】 二神葉子(企画情報部情報システム研究室長), 境野飛鳥(文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー), 原本知実(アソシエイトフェロー)			
【年度実績概要】 当該事業では文化庁からの委託により、25年6月16日～6月27日にカンボジア・プノンペンで開催された第37回世界遺産委員会に関連して下記の項目を実施した。 (1) イコモス(国際記念物遺跡会議)による推薦物件に関する勧告内容一覧の作成(25年5月上旬～5月下旬) ・第37回世界遺産委員会の会議文書が25年5月上旬に世界遺産センターのウェブサイトで公開された後、議題8(世界遺産一覧表の改訂)の会議文書について、全ての推薦物件の名称の仮の和訳を作成した。また、世界遺産委員会の文化遺産の諮問機関であるイコモスからの勧告内容(記載、情報照会、記載延期、不記載)を一覧表とした。 (2) 保全状況報告一覧の作成(同上) ・(1)と同様に審議文書の公開後、議題7(保全状況の報告)の会議文書について、世界遺産一覧表記載物件を有する締約国から定期報告が提出され、第37回世界遺産委員会での検討の対象となる全ての物件の名称を和訳し、一覧表を作成した。 以上で作成した内容は、電子ファイル(Excel形式)で電子メールにより文化庁に提出した。			
 三保松原から臨む富士山			
【実績値】 作成データ数 1件 第37回世界遺産委員会における審議資産概要一覧表			
【受託経費】 654千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8044

業務実績書(受託事業)

研No.46-3

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	第 37 回世界遺産委員会審議調査研究事業（受託）（(1)－①）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】 二神葉子（企画情報部情報システム研究室長）、境野飛鳥（文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー）、原本知実（アソシエイトフェロー）			
【年度実績概要】 当該事業では文化庁からの委託により、25 年 6 月 16 日～6 月 27 日にカンボジア・プノンペンで開催された第 37 回世界遺産委員会に関連して下記の項目を実施した。 (1) イコモスによる推薦物件に関する勧告内容の分析（25 年 5 月下旬～6 月上旬） ・議題 8（世界遺産一覧表の改訂）の会議文書で、文化遺産のイコモスの評価、決議案の要約を作成した。また、締約国が作成した推薦書も参照し、評価のポイントや妥当性、着目すべき点についてコメントを作成した。 ・各推薦物件に関する知識を有する専門家から同様の見地で意見を求め、あわせて提出した。 (2) 世界遺産委員会对処方針作成支援（25 年 5 月下旬～6 月上旬） ・議題 7（保全状況の報告）の会議文書で、文化遺産の審議対象物件のイコモスの評価、決議案の要約を作成した。また、イコモスの現地調査報告書や現地の専門家の意見も参考に、(1)と同様にコメントを作成、提出した。 (3) 世界遺産委員会での情報収集と議事概要の作成（25 年 6 月中旬～7 月上旬） ・第 37 回世界遺産委員会に参加、本会議の全議題と作業指針の作業部会で、発言国・組織ごとに発言内容を記録した。我が国から推薦した「富士山」の審議では、発言記録を審議終了後ただちに文化庁に送付し、報道発表資料の作成の支援を行った。 ・発言内容の記録は議事概要としてまとめ、会期終了 1 週間後に提出した。 (4) 審議における議論の内容及び決議の分析と提言、報告書作成（25 年 7 月中旬～9 月末） ・(3)に基づき議題 7、8 の議事をまとめた。あわせて上記(1)(2)で作成した資料を要約、添付した。 ・物件の推薦や定期報告に関連する議題 11（手続規則の改訂）、12（作業指針の改訂）についても議事をまとめた。 ・本会議での審議全体に関する概要と審議の傾向を簡略にまとめ、提言を記した。 富士山の世界遺産リスト記載直後の会場の様子 以上を報告書とした。報告書のうち文化庁提出分以外は、成果利用の許諾を得て、各地方自治体の世界遺産、文化財担当部局に配布した。			
【実績値】 作成報告書数 1 件 『平成 25 年度文化庁委託 第 37 回世界遺産委員会審議調査研究事業』			
【受託経費】 3,000 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8045

業務実績書(受託事業)

研No.46-4

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	第38回世界遺産委員会における審議資産概要一覧表の作成(受託)((1)-①)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】 二神葉子(企画情報部情報システム研究室長), 境野飛鳥(文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー), 原本知実(アソシエイトフェロー)			
【年度実績概要】 当該事業では文化庁からの委託により、26年6月15日～6月25日にカタール・ドーハで開催予定の第38回世界遺産委員会に関連した資料作成として、下記の項目を実施した。 (1) 世界遺産委員会での審議が予定されている物件の一覧の作成(26年2月～3月) - 世界遺産センターのウェブサイトで公開されている会議文書について、第38回世界遺産委員会での議題7(保全状況の報告)での審議の対象とされている物件の一覧表を作成した。また、議題8(世界遺産一覧表への推薦)での審議の対象とされている全ての物件の名称の仮の和訳を作成し、一覧表とした。 (2) 推薦予定物件に係る資料の作成(同上) (1)で作成した議題8での審議予定物件の一覧表に基づいて、世界遺産センターで公開されている資料、その他信頼できる公的なウェブサイトを中心に資料を収集し、資産ごとにまとめた。 以上で作成した内容は、電子ファイルで電子メールにより文化庁に提出した。			
 議題7で審議予定の「城壁都市バクー、シルヴァンシャー宮殿、及び乙女の塔」			
【実績値】 作成データ数 2件 第38回世界遺産委員会における審議予定物件一覧表 第38回世界遺産委員会における推薦予定物件に係る資料			
【受託経費】 417千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8046

業務実績書(受託事業)

研№.49-1

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	ラチャプラディット寺院螺鈿扉修復計画策定のための調査研究(受託)((2)-①-ウ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】 山下好彦(任期付研究員), 二神葉子(企画情報部情報システム研究室長)			
【年度実績概要】 (1)経緯 タイ・バンコクに所在するラチャプラディット寺院(Wat Ratchapradit)は一級王室仏教寺院のひとつで、1864年にラーマ4世の発願により建立されたとされる。当該寺院の拝殿には、窓及び出入口の扉の建物内側に面した部分に、黒漆螺鈿と漆絵による装飾が施されており、特に螺鈿はその文様と用いられている貝の特徴、文書記録から、日本での製作の可能性があるため、23年6月と24年8月にタイ文化省芸術局の依頼により東京文化財研究所が予備調査を行った。 芸術局からの改めての修理に関する協力要請に対し、日本での調査、専門家の研修を含む、タイ側の機関を実施主体とする5年間の修理計画を立案したところ、25年5月及び6月のタイ側関係機関及び東京文化財研究所での協議を経て、所有者であるラチャプラディット寺院からの受託研究という形式で、扉の螺鈿及び漆絵の部材各1点を日本に持ち込み、試験的な修理を含む修理計画策定のための調査を行うこととなった。  (2)実施項目 ・扉部材の受け入れ 25年10月7日にラチャプラディット寺院と文化省芸術局の関係者が上記扉部材各1点の合計2点を持参、同日、東京文化財研究所に部材を受け入れた。通関手続の後、部材は脱酸素剤とともに密封する脱酸素薰蒸を開始、収蔵庫に安置した。26年1月16日に修復アトリエ(漆)に移動し、脱酸素薰蒸を終了、開封した。 ・調査・修理前写真撮影 調査及び試験的な修理に先立って、部材の写真撮影を行った。 ・分析のための試料採取 用いられている材料、後の修理で用いられた材料の種類、製作技法、材料の産地に関する情報を得ることを目的として、漆膜、下地、木材及び下張に用いられている紙に関する分析のための試料を採取し、分析に供した。 受け入れた螺鈿扉部材(部分)。白く細長いのは剥落防止のための和紙による養生) なお、本受託研究の実施期間は27年3月31日までであるため、平成26年度も引き続き調査研究を実施する。			
【実績値】 扉部材受入点数 2点			
【受託経費】 受入総額 1,135 千円(25年度 300 千円、26年度 835 千円)			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8047

業務実績書(受託事業)

研No.49-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業（ブータン）（受託）（2）－①－ウ）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】 亀井伸雄（所長）、友田正彦（保存計画研究室長）、佐藤桂（アソシエイトフェロー）			
【年度実績概要】 ブータン王国の伝統的建造物保存に関する拠点交流事業 ・ブータン王国内務文化省文化局を相手国拠点とし、石造または版築造と木造との複合構造である同国の民家及び寺院等の伝統的建造物を対象として、それらの文化遺産としての歴史的価値付けと耐震性評価に向けた建築学的、構造学的調査、及び材料実験等を共同で実施することにより、効果的な技術移転と人材育成の促進を図ることを目的とした。 ・事業2ヵ年目にあたる本年度は、以下の日程により2度の専門家派遣を行った。 25年6月21日～7月3日：建築工法及び構造調査（建築及び構造専門分野9名を派遣） 25年10月19日～28日：建築工法及び構造調査＋ワークショップ（建築及び構造専門分野7名を派遣） ・前年度に引き続き、首都ティンプーのほか、パロ、ウォンデュフォダン、プナカの各県において、版築による伝統的建設技法に関する実地調査や簡易的な実測、職人への聞き取り等を行ったほか、版築造民家及び寺院での常時微動計測も実施した。本年度は新たに、実大の型枠を用いた版築壁の施工実験を行ったほか、コアドリルを用いて実際の建物や試験体から採取した土壁供試体の圧縮・引張強度試験等をブータン側と共同で実施し、建築的構造的評価及び解析のための基礎的なデータ収集を行うとともに、調査や実験の方法及び手順について、現地スタッフへの技術移転に努めた。第2回派遣時に開催したワークショップでは、これまでに実施してきた調査成果を共有するとともに、既往の関連研究成果や、今後行すべき研究の方向性について意見交換を行った。			
			
型枠を用いた版築壁の施工実験			
【実績値】 (1) 専門家派遣 2回、現地ワークショップ 1回			
【受託経費】 7,546 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8048

業務実績書(受託事業)

研No.49-3

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	「タンロン・ハノイ文化遺産群の保存」ユネスコ日本信託基金事業(受託)((2)-①-ウ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】 亀井伸雄(所長)、石崎武志(副所長)、友田正彦(保存計画研究室長)、佐藤桂(アソシエイトフェロー)、杉山洋(奈良文化財研究所企画調整部部長)、高妻洋成(奈良文化財研究所保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎(奈良文化財研究所保存修復科学研究室研究員)			
【年度実績概要】 ハノイの都心に立地するタンロン皇城遺跡は、11世紀初頭の大越国建国以来、歴代の王朝が拠点とした宮城の中核域に関する遺跡である。指定対象としての遺跡は、平成14年に国会議事堂建設予定地で発見された李・陳朝期の考古学的遺構と黎朝期以降の地上遺構を含む皇城中枢部の遺跡とで構成されている。その後、日越両政府の合意に基づき両国専門家による協力体制によって調査研究等が行われてきた。 本事業は、歴史・考古・建築・保存科学・社会学及び管理計画策定等の各分野専門家を現地に派遣し、ベトナム側専門家やタンロン・ハノイ遺産保存センター、ハノイ国家大学ベトナム学社会発展科学院、社会科学院考古研究所、同都城研究センター等の現地関係機関との協力の下、同遺跡の歴史的文化的価値をさらに明らかにするとともに、今後のより良い保存に向けた技術的検討と保存管理体制強化を含む総合的支援を行うことを目的としている。 事業の最終第4年度である本年度は、以下の現地ミッションを派遣し、現地調査及び技術研修等を実施した。 25年5月15日～18日:GIS班2名(GIS研修ワークショップ) 25年5月19日～25日:保存管理計画班4名(植民地期建造物実測調査) 25年8月7日～10日:保存科学班5名(遺構保存調査) 25年9月9日～11日:GIS班3名(GIS研修ワークショップ) 25年9月10～15日:総括1名、歴史班2名、考古班2名、建築班1名、社会経済班1名、保存科学班2名、保存管理計画班1名、GIS班2名(成果報告シンポジウム) 25年12月17日～19日:2名(事業終了式典:先方負担による招聘) 25年9月11～12日にタンロン・ハノイ遺産保存センターにて開催した成果報告ワークショップには、日越双方から専門家及び関係者60名余が参加し、これまでの事業成果を共有するとともに、今後の遺跡研究保存管理における課題等について意見を交換した。ここでの発表内容を含む事業実施経緯及び成果の概要については、成果報告書にとりまとめ、ベトナム語、日本語、英語の3言語版で刊行した。また、遺跡内所在のフランス植民地建造物については、実測調査の成果をもとに作成した現状図を収録した図面集を英語版で刊行した。			
			
ハノイでの成果報告シンポジウム			
【実績値】 専門家派遣 6回 現地ワークショップ 2回 現地シンポジウム 1回 刊行物2件 『ユネスコ日本信託基金事業「タンロン・ハノイ文化遺産群の保存」成果報告書』(越日英語)2013.12 300部 『Architectural Drawings of the Buildings from French Colonial Period in the World Heritage Site “Central Sector of the Imperial Citadel of Thang Long - Hanoi”』(英語)2013.12 70部			
【受託経費】 505,400米ドル(事業期間45ヶ月分の総額) 68,330米ドル(25年度)			

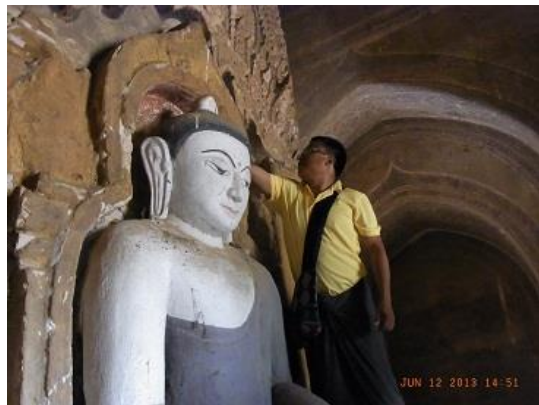
【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8049

業務実績書(受託事業)

研No.49-4

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業（ミャンマー）（受託）（(2)－①－ウ）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】 亀井伸雄（所長）、友田正彦（保存計画研究室長）、佐藤桂（アソシエイトフェロー）、楠京子（アソシエイトフェロー）、山下好彦（任期付研究員）、早川典子（保存修復科学センター主任研究員）、城野誠治（企画情報部画像情報室専門職員）、杉山洋（奈良文化財研究所企画調整部部長）、森本晋（奈良文化財研究所国際遺跡研究室長）、石村智（奈良文化財研究所国際遺跡研究室研究員）、小田裕樹（奈良文化財研究所考古第二研究室研究員）			
【年度実績概要】 ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業 本事業では、ミャンマー連邦共和国文化省考古・国立博物館局を相手国拠点とし、有形文化遺産の保護に関する専門家交流及び技術移転・人材育成への協力を行った。具体的対象としては、歴史的建造物、これに付随する壁画・漆芸等の工芸、そして考古学遺跡・遺物の三分野に焦点を当て、現地への日本人専門家派遣及び日本への同国専門家招聘等を通じて、その調査や保存修復のための手法をミャンマー側に技術移転し、専門的人材の育成に協力しようとするものである。本年度に実施した内容は以下の通りである。なお、考古分野は奈良文化財研究所への再委託により実施した。 ・25年6月9日～14日：建築、美術工芸の2班からなる7名の専門家チームをミャンマーに派遣し、協力事業の開始にあたっての合意形成及び実施に向けての準備・調整等を行った。この間、10日には文化大臣に面会し、当方提案内容について基本的に了承を得た。 ・25年7月19日～28日：考古班の専門家3名を派遣し、ピョ考古学フィールドスクール及びシュリクシェトラ遺跡において遺物調査研究法の素材確認としての現地調査を行った。 ・25年10月23日～31日：美術工芸班の専門家3名をバガンに派遣し、気象観測装置の設置や壁画の撮影等を行ったほか、漆工の専門家1名がバガン・マンダレーほかにて材料や技法等に関する調査を行った。 ・25年11月24日～29日：建築班の専門家3名をバガン・マンダレーほかに派遣し、木造僧院建築の保存上の課題把握と研修カリキュラム作成のための調査を行った。 ・26年1月19日～26日：考古班の専門家3名を派遣し、ピョ考古学フィールドスクール及びシュリクシェトラ遺跡において遺物調査研究法に関する研修及び技術移転を行った。 ・26年2月2日～13日：建築班の専門家5名をマンダレー及びインワに派遣し、考古局スタッフ等11名を対象として、第1回木造建造物保存研修を実施した。 ・26年2月3日～7日：ミャンマー文化省考古・国立博物館局の保存科学専門家2名を日本に招聘し、壁画の保存修復に関する研修を当研究所ほかにおいて行った。 ・26年2月2日～8日：ミャンマー文化省考古・国立博物館局の考古学専門家3名を日本に招聘し、考古遺跡の保存管理と考古遺物の記録法に関する研修を奈良文化財研究所において行った。 本年度事業成果の概要は、当研究所が別途同局職員を招聘して26年2月18日に開催した研究会において報告した。			
  バガン・No.1205 内温湿度計測用データロガーの設置 インワ・バガヤ僧院での木造建造物保存研修			
【実績値】 現地派遣 6回、招聘 2回			
【受託経費】 12,000 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8050

業務実績書(受託事業)

研№50-1

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	平成 25 年度文化遺産国際協力拠点交流事業(ミャンマーの文化遺産保護に関する拠点交流事業・考古分野)(受託)(2)－①－ウ・エ)		
【担当部課】	企画調整部	【事業責任者】	企画調整部長 杉山 洋
【スタッフ】	森本 晋(国際遺跡研究室長)、石村 智(国際遺跡研究室研究員)、田代亜紀子(国際遺跡研究室アソシエイトフェロー)、小田裕樹(考古第二研究室研究員)		
【年度実績概要】	・ 25 年 7 月 19 日～7 月 28 日に、研究員 3 名をミャンマーに派遣し、シュリクシェトラ都城遺跡を見学すると共に現地にある考古学フィールドスクールにおいて、考古遺跡出土遺物の整理・調査方法の研修に用いることができる遺物が収蔵されているかを調査した。 ・ 26 年 1 月 19 日～26 日に、研究員 4 名をミャンマーに派遣し、シュリクシェトラ都城遺跡の考古学フィールドスクールにおいて、考古遺跡出土遺物の整理・調査方法の研修を 37 名の受講生に対して行った。また、シュリクシェトラ都城遺跡の露出展示遺構で最新技術による遺構実測実験を行った。 ・ 26 年 2 月 2 日～8 日に、ミャンマー国文化省考古・国立博物館の考古学専門家 3 名を招聘し、奈良文化財研究所において発掘調査で出土した遺物の整理及び実測などの記録方法についての研修を行った。また、平城宮跡、藤原宮跡、難波宮跡等を見学して遺構保存や復原整備の手法を学ぶとともに、平城宮跡資料館、飛鳥資料館等の博物館で展示手法についても見学した。		
 考古学フィールドスクールにおける研修			
 難波宮跡地域で遺構の復原展示の見学を行うミャンマー人専門家			
【実績値】			
【受託経費】	3,300 千円		

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8051

業務実績書(受託事業)

研No.50-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	平成25年度文化遺産国際協力拠点交流事業 ベトナム・出土木製品保存に関する拠点交流事業(受託)((2)-①-ウ・エ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)、杉山 洋(企画調整部長)、森本 晋(国際遺跡研究室長)、今井晃樹(都城発掘調査部主任研究員)、廣瀬 覚(考古第一研究室研究員)、石村 智(国際遺跡研究室研究員)、田代亜紀子(国際遺跡研究室アソシエイトフェロー)、佐藤由似(国際遺跡研究室研究補佐員)、杉山淳司(京都大学生存圏研究所教授)、Thi Ngoc Bich(ベトナム林業大学教授)、Le Xuan Phuong(ベトナム林業大学講師)、Bui Minh Tri(ベトナム都城研究センター所長)、Nguyen Van Anh(ベトナム都城研究センター研究員)			
【年度実績概要】 (1)25年8月25日～9月1日の期間、ベトナム林業大学より Thi Ngoc Bich 教授と Le Xuan Phuong 講師を奈良文化財研究所に招聘してベトナム産水浸出土木製遺物の保存に関する研究会を行い、ベトナム産木材の基礎研究(樹種同定、組織構造、物理的性質、化学成分)、ベトナム産水浸出土木製遺物の劣化状態及び保存処理研究についての意見交換と研究計画の策定を行った。また、静岡大学及び東京大学農学部を訪問し、日本とベトナム木材利用の歴史について協議した。静岡大学では、ベトナム産水浸出土木製遺物の保存に関する研究会を開催した。 (2)25年9月12日～9月15日の期間、ハノイのベトナム都城研究センターを訪問し、都城研究センターが保存するタンロン皇城遺跡出土木製遺物に関する検討と調査を行った。 (3)26年1月14日～19日の期間、ベトナム国内の木製遺物が出土した遺跡を訪問し、ベトナム林業大学のスタッフとともに出土木製遺物の調査を実施した。調査では、ベトナムにおける出土木製遺物の樹種、劣化状態及び保存処理についての情報収集と木材試料のサンプリングを行った。 (4)26年2月17日～3月1日の期間、ベトナム林業大学より研修生として Nguen Duc Thanh 氏を奈良文化財研究所に招聘し、木製遺物の劣化状態の調査法ならびに保存処理に関する基礎研修を実施した。			
			
			白藤江遺跡で現地保存されている杭 (ベトナム出土木製遺物の調査)
【実績値】 ベトナム産水浸出土木製遺物の保存に関する研究会(2013.8.27、奈良文化財研究所、参加者10名) ベトナム産水浸出土木製遺物の保存に関する研究会(2013.8.29、静岡大学農学部、参加者15名) 木製遺物の劣化状態の調査法ならびに保存処理に関する基礎研修(2014.2.17～3.1、対象者1名) 研究発表(①) ①Y. Kohdzuma, “Conservation of Archaeological Wooden Objects found from the Imperial Citadel of Thang Long”,			
【受託経費】 3,999 千円			

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業（アルメニア及びコーカサス諸国等）（受託）（（2）－①－エ）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 藤澤明（アソシエイトフェロー）、有村誠（客員研究員、金沢大学准教授）、邊牟木尚美（客員研究員、ローマ・ゲルマン中央博物館研修員）、釘屋奈都子（客員研究員、東京藝術大学大学院専門研究員）、鈴木稔（帝京大学大学院准教授）、関根恵梨子（保存修復専門家）、犬塚将英（保存修復科学センター主任研究員）、園田直子（国立民族学博物館教授）			
【年度実績概要】 「アルメニアおよびコーカサス諸国等における文化遺産保護に関する拠点交流事業」の枠組みにおいて、コーカサス諸国等の文化財保存修復専門家間のネットワーク作りに貢献し、幅広い技術交流、人材育成の促進を図ることを目的とした。本事業では、アルメニア共和国文化省と文化遺産保護のための協力に関する合意書に基づき、アルメニア共和国歴史博物館が所蔵する金属考古資料の保存修復・調査研究活動を通じ、若手アルメニア人保存修復家の育成と技術移転を目指した。 (1) ミッションの派遣 25年6月に第5次ミッション、26年1月に第6次ミッションを実施した。第5次ミッション及び第6次ミッションでは、アルメニア共和国歴史博物館にて歴史博物館が所蔵する金属考古資料の保存修復に関するワークショップを開催した（下記2参照）。ワークショップを通して、一連の保存修復処置に必要な知識と技術を習得し、専門家間の意見交換や情報共有を行った。 (2) ワークショップ開催 25年6月12日から25日まで歴史博物館において、第4回目のアルメニア国内向けワークショップ「アルメニア共和国歴史博物館における考古青銅遺物の保存修復」を開催した。ワークショップは保存修復をテーマとし、表面クリーニング、接着、欠損部の充填、科学分析等の実習を行った。 26年1月には第5回目となるアルメニア国内向けワークショップに引き続き、第3回目の国際ワークショップを開催した。ワークショップは予防保存をテーマとし、環境制御、IPM、材料試験等の講義及び実習を行った。 国内ワークショップには、歴史博物館からだけでなく国内の他博物館や研究所からも参加者がおり、国内のネットワーク作りにも貢献した。また、国際ワークショップでは、グルジア（グルジア国立博物館）、イラク（イラク国立博物館）、カザフスタン（アーケオロジカル・エキスパティーズ）、キルギス（国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所）、ロシア（国立エルミタージュ美術館）から保存修復に関わる専門家を招聘し、意見交換及び技術交流を行った。			
【実績値】 ① 報告書2件： 『日本－アルメニア文化遺産保護協力事業報告 第1巻 アルメニア歴史博物館所蔵考古金属資料の保存修復と自然科学的調査2011・2012年度（第1次～第4次ミッション）』60冊 2013.5 「アルメニアおよびコーカサス諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」アルメニア歴史博物館所蔵の考古金属資料の保存修復・調査研究事業及びそれに係る人材育成・技術移転のための協力（第5次、6次ミッション）平成25年度業務報告書 50冊 2014.3 ② 資料集1件：「アルメニア歴史博物館における考古青銅遺物保存修復ワークショップ」平成25年度資料集 50冊 2014.3 ③ ワークショップ参加人数：第4回アルメニア国内向けワークショップ参加者4名、第5回アルメニア国内向けワークショップ参加者7名、第3回国際ワークショップ参加者13名			
【受託経費】 11,999千円			



国内ワークショップ保存修復実習の様子

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8053

業務実績書(受託事業)

研No.51-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業（キルギス及び中央アジア諸国）（受託）（(2)－①－エ）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 安倍雅史（アソシエイトフェロー）、間舎裕生（客員研究員、慶應大学非常勤講師）、森本晋（奈良文化財研究所国際遺跡研究室長）			
【年度実績概要】 当事業は、文化庁の委託を受け、将来的な中央アジアの文化遺産保護を目標に、中央アジア若手研究者の人材の育成を目的とする。具体的には平成23年度から26年度までの4年間、キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所と共同で、キルギス共和国チュー河流域の都城址アク・ベシム遺跡を対象に、「ドキュメンテーション」、「発掘」、「保存修復」、「史跡整備」に関する一連の人材育成を実施している。 事業の3年目に相当する今年度は、「発掘」と「保存修復」「史跡整備」に関するワークショップを2回開催した。 (1)1回目のワークショップは、「遺跡の発掘」と「出土遺物の保存修復」、「史跡整備」をテーマに25年8月27日から9月12日にかけて17日間にわたり、実施した。このワークショップでは、中世の都城址であるアク・ベシム遺跡で発掘実習を行い、また脆弱遺物の取り上げ実習や土層の剥ぎ取り実習などを実施した、また、史跡整備に関しても講義を行い、アク・ベシム遺跡を題材に、史跡整備のプランニングを実施した。 このワークショップには、キルギスから8名、アルメニア、トルクメニスタン、カザフスタン、タジキスタンから1名ずつ、アフガニスタンから2名、計14名の若手専門家が研修生として参加した。 (2)2回目のワークショップは、「考古遺物の保存修復」をテーマに26年2月10日から2月15日にかけて6日間にわたり実施した。このワークショップでは、金属器や土器などの考古遺物の保存修復実習を行い、またシリコン樹脂、石膏を用いたレプリカ作りの実習も行った。このワークショップには、キルギスから計9名の若手研修者が参加した。			
【実績値】 ① 報告書1件 文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業「キルギス共和国および中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業」平成25年度業務報告書 2014.3 ② ワークショップ参加人数：23名			
【受託経費】 12,000千円			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8054

業務実績書(受託事業)

研 No. 51-3

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「ツバル・キリバス・フィジーの文化遺産保護に関する技術的調査」（受託）（(2)-①-エ）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	文化遺産国際協力センター長 川野邊渉
【スタッフ】	久保田裕道（無形文化遺産部主任研究員）、城野誠治（企画情報部専門職員）、境野飛鳥（文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー）、石村智（奈良文化財研究所企画調整部研究員）		
【年度実績概要】	本受託事業は、気候変動による海面上昇の影響を被る可能性の高い文化遺産を抱えたツバル、キリバス、フィジーの三ヵ国において、文化遺産の現状と保護措置を明らかにし、当該分野における今後の日本の国際協力の在り方を検討するものである。26年2月18日～3月2日にかけて、以下の項目に関し現地調査を実施した。 (1) ツバル ・フナフティ島及びフナファラ島（離島）における有形・無形文化遺産調査。 ・政府関係（内務大臣・外務大臣等）からの文化遺産に関わる政策の聞き取り。 ・南太平洋大学ツバルキャンパスにおいて研究者との文化遺産・環境に関する意見交換。 ・文化遺産保護関連法についての情報収集。 (2) キリバス ・タラワ環礁北部のブアリキ島、及びアバイアン島における有形・無形文化遺産調査。 ・教育文化相からの文化遺産に関わる政策の聞き取り。 ・文化遺産保護関連法についての情報収集。 (3) フィジー ・南太平洋大学 PACE-SD Office において、レオーネ氏ら研究者との文化遺産に関する意見交換。 ・文化遺産保護関連法についての情報収集。 以上の結果を「業務結果説明書」にまとめた。		
【実績値】	業務結果説明書（電子データ）		
【受託経費】	4,150 千円		



ファレカウプレ（伝統的集会所）における
舞踊調査（ツバル）

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8055

業務実績書(受託事業)

研No.51-4

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	ユネスコ・日本文化遺産保存信託基金 シルクロード世界遺産登録に向けた支援事業(ウズベキスタン)(受託)((2)-①-エ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 安倍雅史(アソシエイトフェロー)、間舎裕生(客員研究員、慶應大学非常勤講師)、森本晋(奈良文化財研究所企画調整部国際遺跡研究室長)			
【年度実績概要】 26年度のシルクロード関連遺跡の世界遺産登録を目指し、中央アジア5カ国と中国は、様々な活動を行ってきた。この活動を支援するため、文化遺産国際協力センターは、23年度より3年間にわたりユネスコ・日本文化遺産保存信託基金による「シルクロード世界遺産登録に向けた支援事業」に参加し、中央アジア各国で様々な人材育成ワークショップを実施してきた。 文化遺産国際協力センターは、このプロジェクト最後の人材育成ワークショップをウズベキスタン共和国タシケントのユネスコ・タシケント事務所で25年12月1日から12月3日にかけて開催した。今回は、「文化遺産の写真測量」をテーマに研修を行い、研修には14名のウズベク人若手専門家が参加した。 また、人材育成ワークショップ終了後に、25年12月4日、5日と同じくタシケントで開催された「シルクロード世界遺産登録に向けた支援事業の最終会議」にも参加した。この会議では、東京文化財研究所やロンドン大学が中央アジア各国で実施してきた人材育成事業のレビューを行った。各国からは、今後も同様の研修を継続してほしいとの声があり、特に「歴史的建造物の測量」、「遺跡の保存」、「文化遺産のマネージメント」に関する研修を行ってほしいとの要望が寄せられた。			
			
講義の様子			
【実績値】 ② 報告書:1件 Final Report on the UNESCO Workshop on Documentation of Archaeological Sites in Tashkent, 2013 ② ワークショップ参加人数:14名			
【受託経費】 16,655米ドル			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8056

業務実績書(受託事業)

研No.51-5

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	ユネスコ・日本文化遺産保存信託基金 シルクロード世界遺産登録に向けた支援事業（タジキスタン）（受託）（(2)－①－エ）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 久米正吾（アソシエイトフェロー）、山田大樹（アソシエイトフェロー）、山藤正敏（客員研究員、日本学術振興会特別研究員 PD）			
【年度実績概要】 現在、中央アジア 5 カ国と中国が、シルクロード関連遺跡の世界遺産一括登録を目指し、国境の枠を超え、様々な活動を行っている。この活動を支援するため、文化遺産国際協力センターは、23 年度より、ユネスコ・日本文化遺産保存信託基金「シルクロード世界遺産登録に向けた支援事業」に参加し、中央アジア各国で様々な事業を行っている。昨年度に引き続き、今年度もタジキスタン共和国において、タジキスタン共和国文化省等と共同で 25 年 11 月 7 日～14 日までの 8 日間、考古遺跡のドキュメンテーションにかかる技術移転と人材育成を目的としたワークショップを開催した			
			
			現地での研修の様子
今回の研修では世界遺産にノミネートしている中世の都城址「フルブック遺跡」を対象に実習を行った。実習は講師として日本から専門家(木口氏)を招聘し、トータルステーションを使用した測量、CAD を使ったドキュメンテーション、GIS を用いた分析に関する研修を行った。			
今回のワークショップには国立古代博物館から 2 名、歴史・考古・民族学研究所から 2 名、歴史文化遺産保護活用局から 1 名、現地フルブック博物館から 3 名、クローブ博物館から 1 名、計 9 名の若手専門家が研修生として参加した。			
参加者は約 1 週間にわたる集中講義・実習を経て、ドキュメンテーションのための測量計画と実施、その分析に関わる専門的プロセスを学習し、また、本事業に伴って寄贈された測量機材や GPS 機材などの使い方を習得することが出来た。研修修了者はこの経験と提供機材を当該国における文化財の調査や保護、そのドキュメンテーションに役立てることになる。			
【実績値】 報告書 1 件： ① UNESCO/Japan Funds-in-Trust Project “Support for Documentaion Standards and Procedure of Serial and Transnational Nomination of Silk Roads in Central Asia” NRICP Tokyo Activities in Tajisitan 2013. ② ワークショップ参加人数：計 9 名			
【受託経費】 29,000 米ドル（2,437 千円）			

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8057

業務実績書(受託事業)

研No.51-6

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	ユネスコ・日本文化遺産保存信託基金 パーミヤーン遺跡保存事業(受託)((2)-①-エ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 安倍雅史(アソシエイトフェロー)、久米正吾(アソシエイトフェロー)、近藤洋(研究補佐員)、谷口陽子(客員研究員、筑波大学准教授)、鈴木環(客員研究員、JICA 専門家)、前田耕作(和光大学名誉教授)、ファビオ・コロombo(保存修復専門家)、岡崎甚幸(武庫川女子大学教授)、森本晋(奈良文化財研究所国際遺跡研究室長、石村智(国際遺跡研究室研究員)、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)、田代亜紀子(国際遺跡研究室アソシエイトフェロー)			
【年度実績概要】 16 年より、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金によるパーミヤーン遺跡保存事業に参画し、パーミヤーンの文化遺産保護のために様々な活動を実施している。本年度は、パーミヤーン遺跡保存にむけた調査研究、キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所と連携したアフガニスタンの考古学専門家の人材育成・技術移転を実施し、パーミヤーン遺跡の保存にむけた報告書等を刊行した。			
(1) パーミヤーン遺跡保存事業 アフガニスタンのパーミヤーン遺跡において、アフガニスタン情報文化省と共同で「パーミヤーン遺跡保存事業」第11次ミッションを実施し(25年9月28日～10月6日)、下記の作業を実施した。 1. 保存修復処置を実施したパーミヤーン谷I窟、N(a)窟、C(a)窟、C(b)窟、D窟、D1窟の壁画の状態調査。 2. 石窟及び収蔵庫等の環境測定データの回収。 3. フォーラーディ谷石窟及び壁画の状態調査。 4. 考古遺跡の状態調査。 5. 新博物館構想の実現に向けた景観情報の収集。 6. 上記の作業を通じたアフガニスタン専門家の人材育成・技術移転、 7. 現地大学生への公開レクチャー。			
(2) 考古学専門家の人材育成・技術移転 アフガニスタン考古学研究所よりアフガニスタン人専門家2名をキルギス共和国に招聘し、発掘研修を行った(25年9月1日～12日)。キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所と連携し、アクベシム遺跡において遺跡発掘、遺構測量、出土遺物の保存修復についての研修を実施した。			
(3) 第12回ユネスコ・パーミヤーン遺跡保存事業専門家会議への出席 イタリア環境保護調査研究所の主催によりイタリア、オルビエトで開催された専門家会議に出席し、調査、保存修復成果及び新博物館構想についての発表を行った。また、今後の事業の方針について、ユネスコ、イクロム、ドイツ隊、イタリア隊、フランス隊等との協議を行なった(25年12月8日～13日、5名)。			
(4) 本事業の枠組みで実施されたパーミヤーン谷石窟の建築学的報告、保存修復及び石窟構造に関する資料集、今年度の事業概報を作成した(①報告書4件)。			
【実績値】 ①報告書4件： ・Recent Cultural Heritage Issues in Afghanistan, Supplement 6『Documentation of the Bamiyan Sites 3: Conservation of the Mural Paintings of the Bamiyan Buddhist Caves』2013.6.28 ・Recent Cultural Heritage Issues in Afghanistan, Volume 5『Structure, Design and Technique of the Bamiyan Buddhist Caves』2013.7.17 ・『UNESCO/Japan Funds-in-Trust Project for the Safeguarding the Cultural Landscape and Archaeological Remains of the Bamiyan Valley: Final Report 2013』2014.1.31 ・Recent Cultural Heritage Issues in Afghanistan, Supplement 7『Documentation of the Bamiyan Sites 4: Architectural Survey of the Bamiyan Buddhist Caves』2014.3.31 ②研修参加人数：2名(キルギス、アクベシム遺跡) ③国際会議参加人数：5名(イタリア、オルビエト)			
【受託経費】 63,164米ドル(5,753千円)			

【受託】
(様式 3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8058

業務実績書(受託事業)

研No.54-1

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズⅡ)に係る国内支援業務(受託)((3)-①)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 島津美子(前文化遺産国際協力センター特別研究員)、藤澤明(アソシエイトフェロー)、川口雄嗣(アソシエイトフェロー)、田島さか恵(アソシエイトフェロー)、本郷浩志(事務補佐員)、松田泰典(客員研究員、大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト JICA 専門家テクニカルチーフアドバイザー)			
【年度実績概要】 当事業は、独立行政法人国際協力機構(JICA)の委託を受け、主としてエジプト国大エジプト博物館保存修復センター(GEM-CC)における人材育成に係る以下の業務を行った。(1)計画策定支援、(2)研修支援、(3)専門家派遣支援 (1)研修計画策定のための専門家(講師)全体会議を2回(25年4、12月)開催し、「保存修復人材育成プログラム」における27年度までの各研修計画を策定した。 (2)本格化した保存修復分野の研修のほか、保存科学分野や予防保存分野などの部門横断的な研修を引き続き支援するため、必要な教材・資機材についての助言、資料作成支援、翻訳、語彙集の作成、及び本邦研修について研修協力機関とのアレンジを含めた全般的な調整を行った(カッコ内は開催時期と参加人数)。 ＜現地研修(計7回)＞ 「第2回染織品研修」(25年4月、16名) 「第3回労働安全衛生研修」(25年4～5月、19名) 「文化財の診断技術・分析法研修」(25年5月、10名) 「第6回所内移動・梱包研修」(25年6月、35名) 「国外視察研修(含むBUMA8奈良大会)」(25年9月、3名) 「第7回所内移動・梱包研修」(26年2月、23名) 「第2回彩色文化財研修」(26年2月、16名) ＜本邦研修(計4回)＞ 「第4回収蔵品管理研修」(25年6月、6名) 「第3回染織品研修」(25年9月、8名) 「第3回微生物管理研修」(26年1月～2月、3名) 「木材研修」(26年2月、7名) このほか26年度上半期に実施予定の各研修の準備を継続して行った。 (3)上記研修の講師としてのJICA派遣専門家の推薦と研修支援、研修協力機関との調整を行った。また、現地に派遣されているJICA長期及び短期専門家の活動に対し継続的な支援を行った。 以上のほか、GEM-CCの運営体制や研修資機材の調達と管理についての助言、博物館の保存修復における技術情報支援を行った。			
【実績値】 報告書 2件(①～②)、計画案 1件(③) ① 『大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズⅡ)業務実施報告書(上半期分)』2013.10 ② 『大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズⅡ)業務実施報告書(下半期分)』2014.3 ③ 「大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト(フェーズⅡ)26年度研修計画(案)」			
【受託経費】 26,893千円			



第3回染織品研修の様子

【受託】
(様式 3)

施設名 アジア太平洋無形文化遺産研究センター

処理番号 8059

業務実績書(受託事業)

研 No. 56-1

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	平成 25 年度 無形文化遺産保護パートナーシッププログラム(受託) (4)		
【担当部課】	－	【事業責任者】	副所長 大貫美佐子
【スタッフ】 児玉茂昭(アソシエイトフェロー)、井内千紗(前アソシエイトフェロー)、辻修次(アソシエイトフェロー)			
【年度実績概要】			
○アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する調査研究 アジア太平洋地域の無形文化遺産の保護に関する知見の共有ならびに域内の協力を強化することを目的に、各地域の研究者を招集し、国際専門家会合「アジア太平洋地域における無形文化遺産保護に関する調査研究の把握と検討」(タイ・ユネスコバンコク事務所、26 年 2 月 19 日～20 日)を開催した。			
○無形文化遺産のネットワークの構築			
(1)国際会議への出席			
①成都国際会議(中国・成都、25 年 6 月 14 日～16 日)			
②中国 C2 センター(CRIHAP)第 2 回運営理事会(中国・成都、25 年 6 月 17 日)			
③無形文化遺産分野 C2 センター第 1 回総会(ブルガリア・ソフポル、25 年 7 月 23 日～28 日)			
④韓国 C2 センター(ICHCAP)第 3 回運営理事会(韓国・大田、25 年 9 月 29 日～10 月 1 日)			
⑤第 8 回政府間委員会(アゼルバイジャン・バクー、25 年 11 月 30 日～12 月 10 日)			
(2)運営理事会の開催 「センター第 2 回運営理事会」(ホテルグランヴィア京都、25 年 10 月 21 日)を開催した。本理事会では、センター中長期計画や規程の改正、過年度の事業報告、今後の事業計画について審議の上、承認された。			
(3)ウェブサイトの更新 「無形文化遺産保護条約採択 10 周年記念シンポジウム」の事業報告の掲載や、現行の日本語、英語、タイ語、ベトナム語に加え、タミル語、クメール語、ラオ語を新規に追加し、計 7 言語での情報発信に向けた準備作業を行った。			
○無形文化遺産保護条約採択 10 周年記念シンポジウム 文化庁、堺市との共催で「無形文化遺産保護条約採択 10 周年記念シンポジウム」(ホテルアゴーラリージェンシー堺、25 年 8 月 3 日)を開催した。シンポジウムの第一部では、二つの基調講演とパネルディスカッションを行い、第二部では、佐陀神能とカンボジアの宮廷舞踊の公演を行った。			
○無形文化遺産の保護の方法に関するワークショップ 「無形文化遺産の記録と活用に関するワークショップ」(東京国立博物館、26 年 2 月 4 日～6 日)を開催した。			
  			
国際専門家会合(バンコク) 10 周年記念シンポジウム(堺市) ワークショップ(東京国立博物館)			
【実績値】			
国際会議出席回数		5 回(上記、国際会議)	
国際会議開催回数		4 回(海外 1 回(バンコク)、国内 3 回(理事会、シンポジウム、ワークショップ))	
10 周年記念シンポジウム出席者		291 人	
ウェブサイトアクセス件数		5,454 件(25 年 4 月 1 日～26 年 3 月 31 日)	
刊行物		1 冊	
『2013 Study Tour Report : Toward Safeguarding the Intangible Cultural Heritage for the Promotion of Cultural Identity and Community Resilience in Timor-Leste』			
【受託経費】			
51,367 千円			

【受託】
(様式 3)

施設名 アジア太平洋無形文化遺産研究センター

処理番号 8060

業務実績書(受託事業)

研 No. 56-2

中期計画の項目	5 文化財保護に関する国際協力の推進		
【事業名称】	東ティモール無形文化遺産専門家向けスタディツアー(受託)(4)		
【担当部課】	—	【事業責任者】	副所長 大貫美佐子
【スタッフ】	児玉茂昭(アソシエイトフェロー)、井内千紗(前アソシエイトフェロー)、辻修次(アソシエイトフェロー)		
【年度実績概要】	ユネスコジャカルタ事務所との共催で、東ティモールの文化担当行政官を対象に「東ティモール無形文化遺産専門家向けスタディツアー」を25年10月22日～26日に実施した。本研修では下記の箇所を訪問し、日本における無形文化遺産への行政の取り組みについて学ぶとともに、無形文化遺産の実例の視察と継承者との意見交換を行った。 レクチャー 「日本の無形文化遺産保護のシステム」 文化庁(東京) 10月23日 「なまはげ館における展示の手法と伝承の取り組み」 なまはげ館(秋田) 10月24日 「結城紬技術保存のための結城市の取り組み」 結城市伝統工芸コミュニティセンター(茨城) 10月25日 「結城紬継承の現状と課題」 同上 「結城紬の広報について」 つむぎの館(茨城) 同上 視察 特別展「京都－洛中洛外図と障壁画の美」 東京国立博物館(東京) 10月22日 無形文化遺産部の調査活動 東京文化財研究所(東京) 10月23日 歌舞伎 国立劇場(東京) 10月26日 常設展示 なまはげ館及び男鹿真山伝承館(秋田) 10月24日 トレーニングプログラム 結城市伝統工芸コミュニティセンター(茨城) 10月25日 常設展示 つむぎの館(茨城) 同上 常設展示 益子参考館(栃木) 同上 益子焼の市場 益子町内(栃木) 同上 セッション 東京国立博物館会議室及び小講堂 10月22日及び10月26日 最終日には参加者が研修を通じて得た知識をもとに、東ティモールの無形文化遺産保護について討論を行った。  つむぎの館視察(10月25日) 東京国立博物館での討論(10月26日)		
【実績値】	参加人数 9名 レクチャー回数 5回 視察 8箇所 刊行物 1冊 『2013 Study Tour Report : Toward Safeguarding the Intangible Cultural Heritage for the Promotion of Cultural Identity and Community Resilience in Timor-Leste』(ただし、別予算から刊行)		
【受託経費】	4,648 千円		

【受託】
(様式 3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8061

業務実績書(受託事業)

研No.78-1

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
【事業名称】	平城宮跡歴史公園および朱雀大路緑地等の発掘調査(受託) ((4)－①)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】 小池伸彦(考古第一研究室長)、渡邊晃宏(史料研究室長)、神野 恵(都城発掘調査部主任研究員)、川畑 純(考古第三研究室研究員)、番 光(遺構研究室研究員)・芝 康次郎(考古第一研究室研究員)・石田由紀子(考古第三研究室研究員)、松下迪生(遺構研究室アソシエイトフェロー)、中村一郎(写真室主任)、鎌倉 綾(写真室技能補佐員)			
【年度実績概要】 平城宮跡展示館の建設に伴う平城京左京三条一坊一・二坪の調査(A:平城第515次)と、休憩施設等の設置に伴う平城宮跡中央区朝堂院周辺及び第一次大極殿西南の調査(B:同517次)の2箇所に分かれる。Aは北区・南区の2箇所に、Bは3箇所の小調査区にさらに分かれる。このうちBの第一次大極殿院西南の調査区はさらに南北の2箇所に分かれる。調査面積はAが計264㎡、Bが計156㎡、調査期間はAが平成25年5月16日～31日、Bが同年8月5日～29日。			
・基本層序 A:上から造成盛土150cm、畑地・水田耕作土30～50cm、遺物包含層10cm、整地土。 B:上から造成盛土70～100cm、耕作土・床土50～80cm、遺物包含層20cm、地山。			
・主な検出遺構 A:北区では南北溝1条、南区では東西溝1条(三条条間北小路南側溝)と古墳周濠を検出した。 B:中央区朝堂院東北の調査区では瓦溜まり、第一次大極殿院西南の調査区では、小穴・溝状遺構を検出した。			
・主な出土遺物 A:冶金関連遺物、土器、埴輪、瓦 B:土器、瓦、木製品			
・調査所見 A:両調査区とも西半にボックスカルバートが設置され、遺構は損なわれていたが、それを除けば、遺構の遺存状況は良好であることが判明した。南区では三条条間北小路南側溝を検出し、条坊復元のための貴重な情報を得た。また南区では新たに古墳の存在が判明し、平城京造営以前の様相を知る上で貴重な情報を得た。 B:中央区朝堂院東北の調査区で検出した瓦溜まりは、遺構検出面の標高及び堆積土からみて、小さな谷地形に落ち込んだ流路に由来するものと考えられる。中央区朝堂院西南の調査区では、自然流路(奈良時代以降か)を検出したにとどまった。第一次大極殿院西南の調査区では、南北区ともにGL-1.6m付近で小穴及び溝状遺構を検出した。仮設建物の建設予定地であるため、遺構の検出に留め、掘り下げは行わなかった。このため性格は不明だが、遺構の年代は出土遺物(土器、瓦)から奈良時代に属すると考えられる。いずれも平城宮内の当該地区の様相を知る上で貴重な成果である。		A南区 三条条間北小路南側溝及び古墳の周壕 (北から)	
【実績値】 論文等数:3件(①～③) ①川畑 純「平城京左京三条一坊一・二坪の調査(平城第515次)」『奈文研ニュース』No.50、奈文研、2013.9 ②川畑 純ほか「平城京左京三条一坊一・二坪の調査 一第515次」『奈良文化財研究所紀要2014』奈文研、2014.6(予定) ③芝 康次郎ほか「平城京中央区朝堂院等の調査 一第517次」同上 (参考値) A:出土遺物:木製品1点、木炭2点、冶金関連遺物コンテナ1箱、土器・埴輪コンテナ15箱、瓦磚類コンテナ5箱(軒丸瓦1点を含む) 記録作成数:実測図12枚(A2判)、遺構写真18枚(4×5) B:出土遺物:木製品5点 土器コンテナ3箱 瓦磚類 コンテナ42箱 記録作成数:遺構写真12枚(4×5)、実測図16枚(A2判)			
【受託経費】 6,260千円			

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
【事業名称】	第一次大極殿院建造物復原整備にかかる調査（(4)－①）		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】			
松村恵司（所長）、小野健吉（副所長）、小池伸彦・箱崎和久・清野孝之・渡辺丈彦・山本 崇・黒坂貴裕・今井晃樹・大林 潤・諫早直人・森先一貴・小田裕樹・番 光・石田由紀子・海野 聡・庄田慎矢・芝 康次郎・川畑 純・前川 歩・中川二美・井上麻香・松下迪生・中島咲紀・村山聡子（以上、都城発掘調査部）、林 良彦（文化遺産部長）、鈴木智大・中島義晴（以上、文化遺産部）、小澤 毅・脇谷草一郎・児島大輔（以上、埋蔵文化財センター）、窪寺 茂（建築装飾技術史研究所長、客員研究員）、上田浩司（研究支援推進部長）、田中康成（連携推進課長）			
【年度実績概要】			
国土交通省による第一次大極殿院地区の整備に伴う復原検討の 4 年目。奈良時代前期（Ⅰ－Ⅱ期）の第一次大極殿院を構成する、南門、東楼・西楼、築地回廊の各建物、及び大極殿院の地形等について往時の形態を復原するのが目的である。所内復原検討会は計 11 回開催し、また、有識者を招聘し、復原建物自体と、その復原根拠資料に関する検討会を計 2 回開催した。これらによって、対象建物の復原設計の大意が固まった。そして、検討の内容を収録した『第一次大極殿院復原検討会記録』（内部資料）を刊行した。			
・南門の検討			
現存建築や絵画史料等の検討から、上下層の柱高・柱径、組物の各部材寸法といった細部の寸法を決定した。このほか、柱間装置等について検討し、復原図を作成した（第 49, 54, 55 回検討会）。		有識者を招聘した検討会 (25 年 9 月 30 日～10 月 1 日)	
・東楼・西楼の検討			
架構、屋根形式、組物、天井等は互いに関係するため、これらについて作図し、納まり等を検討した。その結果、梁と束で棟木や隅木を支える架構、寄棟造、組物は平三斗、格天井とする案が最も妥当と考えられた。また、柱間装置のほか細部の寸法等を決定し、復原図を作成した（第 51, 55 回検討会）。			
・築地回廊とそれに開く小門の検討			
発掘遺構、現存建築及び発掘遺構の類例、史料等の検討の結果、築地回廊の桁行柱間寸法は基本的に 15.5 尺等間と考えられた。北面回廊の中央に開く門は、桁行 15 尺等間の八脚門、東面・西面回廊には、桁行 1 間の小門が各 3 箇所ずつ開くと考えられた。築地回廊、北門、小門の上部構造については、構造形式のほか、軒の出・柱高・柱径といった主要寸法等を決定し、これらの復原図を作成した（第 48, 50, 51, 52, 53, 55, 56 回検討会）。			
・彩色・金具の検討			
出土瓦に付着した赤色色料の科学分析により、主な建築木部には、酸化鉄系の赤色塗装が施されていたことが判明した。これと並行して、文化財建造物の修理工事報告書や絵画史料、発掘出土品からも、彩色・飾金具についての検討を進めた。一方、古代の建築木部の塗装については不明な点が多いため、塗装手板を作成し、耐候性試験を実施した（第 57, 58 回検討会）。			
【実績値】			
・第一次大極殿院復原検討会開催数：11 回（第 48～58 回）			
・第一次大極殿院復原建物検討会（25 年 9 月 30 日～10 月 1 日）：有識者 3 名招聘			
・第一次大極殿院復原資料検討会（25 年 12 月 16 日）開催：有識者 4 名招聘（ほか 2 名にも指導・助言を頂いた）			
・類例調査：国内 4 回			
論文等数：4 件（①～④）			
①海野 聡「東西楼……第一次大極殿院の復原研究 12」『奈良文化財研究所紀要 2014』奈文研、2014.6（予定）			
②中島咲紀「南門……第一次大極殿院の復原研究 13」同上			
③井上麻香「回廊……第一次大極殿院の復原研究 14」同上			
④中川二美「礎・瓦……第一次大極殿院の復原研究 15」同上			
報告書等数：2 件（⑤・⑥）			
⑤⑥『第一次大極殿院復原検討会記録 7』『同 8』（いずれも内部資料）2014.3			
【受託経費】			
39,091 千円			

【受託】
(様式3)

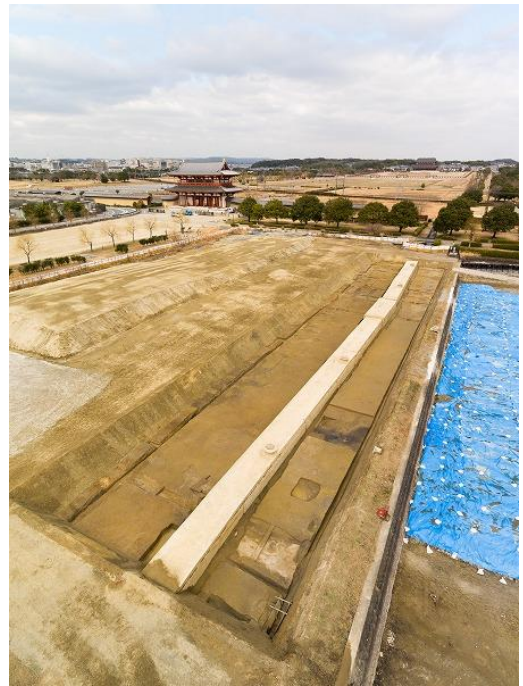
施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8063

業務実績書(受託事業)

研No.78-3

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
【事業名称】	朱雀大路緑地遺跡の発掘調査(受託) (4)－①		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 渡辺丈彦(都城発掘調査部主任研究員)、山本祥隆(史料研究室研究員)、海野 聡(遺構研究室研究員)、青木 敬(考古第二研究室研究員)、諫早直人(考古第一研究室研究員)、大澤正吾(考古第二研究室研究員)、中村一郎(写真室主任)、栗山雅夫(写真室技術職員)			
【年度実績概要】 国土交通省の平城宮跡展示館の建設に伴う事前調査。平城京左京三条一坊八坪にあたる北新大池内の調査区(A)、及び同一坪にあたる旧道路下の調査区(B)の2箇所に分かれる。Aは調査面積が450㎡、調査期間が25年11月5日～29日。Bは調査面積が1953㎡、調査期間が25年12月16日～26年3月28日。			
・基本層序 A：旧建物の基礎による地盤改良剤により大きく攪乱を受けており、攪乱下で地山(灰色細砂・黒灰粘土)を検出し、この上面で遺構を検出した。 B：上から、整備盛土(約1.5m)、耕土・床土(約50cm)奈良時代の整地土数層(最大30cm)、地山(灰色細砂)の順。一部整地土が完全に削平されている箇所がある。最上層の整地土上面または地山面上が遺構検出面。			
・検出遺構 A：弥生時代後期の溝2条、時期不明の自然流路2条。 B：奈良時代の建物3棟、堀1条、坪内道路、三条条間北小路。			
・出土遺物 A：溝より弥生時代後期の土器及び種実等自然遺物、自然流路より風倒木。 B：床土及び整地土、道路側溝より瓦片、土器片、埴輪片、木炭。			
・調査所見 A：攪乱により奈良時代の遺構は検出できなかったが、弥生時代後期の溝のほか自然流路などを検出し、奈良時代以前の当該地区の様相を知るうえで貴重な資料を得た。 B：既検出の建物1棟、堀1条、道路2条の東延長部分に加え、調査区北東部で新たに建物2棟を検出した。それ以外には全体的に遺構は少なく、当該坪が朱雀門前の広場的空間として利用されていたことを確認した。平城京における土地利用の多様性を知るうえで貴重な資料を得た。			
【実績値】 論文等等：2件 (①・②) ①小田裕樹ほか「平城京左京三条一坊八坪の調査 ー第515・522次」『奈良文化財研究所紀要2014』奈文研、2014.6(予定) ②山本祥隆ほか「平城京左京三条一坊一坪の調査 ー第522次」『奈良文化財研究所紀要2015』奈文研、2015.6(予定)(参考値) A：出土遺物：土器・土製品 コンテナ4箱、種実多量 記録作成数：実測図16枚(A2判)、遺構写真12枚(4×5) B：出土遺物：丸瓦・平瓦 コンテナ11箱、土器・土製品 コンテナ3箱、木炭多量 記録作成数：実測図55枚(A2判)、遺構写真8枚(4×5)			
【受託経費】 25,780千円			



B 調査区全景 (東南から)

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8064

業務実績書(受託事業)

研No.80-1

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
【事業名称】	平城宮跡展示館詳覧ゾーン展示内容調査業務(受託)(4)－①)		
【担当部課】	企画調整部 展示企画室	【事業責任者】	企画調整部長 杉山 洋
【スタッフ】	加藤真二(展示企画室長)、中川あや(展示企画室研究員)、渡邊淳子(展示企画室アソシエイトフェロー)		
【年度実績概要】	(1) 他の博物館等施設(38施設)の視察を行い、展示内容、展示構成、展示手法の観点から調査し、詳覧ゾーンの展示基本設計見直しの参考とした。 (2) 利用者調査(平城宮跡資料館他)、企画段階調査(詳覧ゾーン展示計画)、において、アンケート調査・インタビュー調査・行動観察調査等を行い、詳覧ゾーン展示基本設計見直しの参考とした。 (3) 以上の(1)、(2)の結果をふまえて検討した基本設計の展示見直し案にもとづき、展示候補物をリスト化した。  企画段階調査 インタビュー調査風景		
【実績値】	(1) 施設視察報告書 1式(41施設) (2) 展示評価分析報告書 1式(アンケート調査952件、展示評価のためのインタビュー調査10回、行動観察調査4回、フォーカスグループインタビュー2回の成果を反映) (3) 展示候補物リスト 1式(225件分)		
【備考】	6,770 千円		

【受託】
(様式3)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 8065

業務実績書(受託事業)

研No.86-1

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	関西大学博物館及び考古学研究室保管奈良県高市郡明日香村牽牛子塚古墳出土夾紵棺一括の修理(受託)((1)－①)		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	伝統技術研究室長 北野信彦
【スタッフ】 犬竹和(修復家)			
【年度実績概要】 本事業で修理を行った資料は、終末期古墳(7世紀)である奈良県高市郡明日香村牽牛子塚古墳から出土した夾紵棺(漆製の棺)の破片である。関西大学が保管している大正の発掘品破片7点と考古学研究室に保管されている昭和52年に明日香村が古墳の保存環境整備に伴う発掘で出土した破片一括である。 夾紵棺の製作技法は縄文、弥生、古墳時代の遺跡から出土する日本の漆製品とは相違がある。これらの資料は破片ではあるが当時の社会変革や仏教伝来などに伴う大陸からの人や物の流入、工芸品製作の技術移転を考察する上で重要な資料である。 資料中には斉明天皇と間人皇女の棺の破片が混在していると考えられているが、両者を判別出来ていない状態で、全体像の解明を含め、今後の調査研究が期待されている。しかしながら、夾紵棺の殆どが関西大学を含め、数カ所に散在して断片として保管されているため資料研究が進んでいないのが現状である。従って、関西大学が保管している資料も調査研究を進め資料情報を公開し、他の研究機関や研究者と広く資料情報を共有する必要があるが、昭和52年に発掘後漆膜の剥落や亀裂、損傷などを防止するためかなり厚く樹脂が塗布されているので表面観察が難しく、調査研究の妨げとなってしまうため以後進展していない。また表面の光沢が著しく展示などの資料公開も一部に限られていた。 さらにこの樹脂が夏などの高温期に特に軟化し、粘着性を持ち、保護紙と付着し、これを剥がそうとすると、かえって漆膜ごと剥がれてしまうなどの損傷を与えていた。また樹脂の塗布後30年以上経過し樹脂の劣化が原因と思われる臭いがするなど、明らかに樹脂の経年劣化が見受けられた。 従って、今回の修理では資料の観察を妨げている劣化した樹脂をできるだけ除去し、資料の調査研究ができるような状態にした。尚かつ安全な今後の保管のため脆弱部分については強化処置を行った。 概要 ◇修復対象 夾紵棺破片一括 ◇修復概要 (1) 過去の保存処理で使用された強化処理剤の除去：劣化した強化処理剤を有機溶剤(エチルアルコール)で溶かし除去した。 (2) 土などの汚れの除去：表面の汚れは蒸留水と有機溶剤(エチルアルコール)を少量筆に含ませて除去した。 (3) 強化処理：劣化して脆弱になった破片をアクリル樹脂エマルジョンで強化した。 (4) 漆膜の剥落留め：漆膜の接合はアクリル樹脂で点接合した。 (5) 接合：アクリル樹脂を使用して破片を接合した。 ◇効果と課題 以上の修理、とりわけクリーニング作業を実施した結果、これまで他の機関が少数の資料を調査した断片的な結果しか知られていなかった本資料群の塗装技術の実態を、ほぼ網羅的に明らかにすることができた。今後は、本資料群をどのような資料活用元とするのが課題である。			
 修理対象資料			
【実績値】受託事業報告書 1件：『関西大学博物館および考古学研究室保管奈良県高市郡明日香村牽牛子塚古墳出土夾紵棺一括の修理報告書』、東京文化財研究所、14, 3, 20、(内容：対象資料である牽牛子塚古墳出土夾紵棺一括の修理工程及び作業時で知り得た情報に関する報告書) 本事業は関西大学から委託			
【受託経費】 1,365千円			

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	小石川後楽園得仁堂収蔵物の保存修復科学的調査委託（受託）（(1)－①）		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	伝統技術研究室長 北野信彦
【スタッフ】 桐原 瑛奈（研究補佐員）、山下好彦（文化遺産国際協力センター任期付研究員）、西山陽（修復家）			
【年度実績概要】 本事業で調査対象となった文化財は、江戸時代には旧水戸藩邸庭園であった小石川後楽園に所在する得仁堂内に長年収蔵されていた螺鈿机 1 点である。 この得仁堂は寛文 8 年(1668)に水戸藩主徳川光圀によって建立された東京都指定文化財であり、この堂内収蔵物である螺鈿机も他からの搬入品というよりは本建造物由来の文化財であると理解されている。この螺鈿机は天板のみならず脚部や側板にも緻密な草木花蝶の文様が螺鈿漆塗りで加飾されていたことが、漆塗膜や螺鈿貝の残存痕跡から理解される優品である。ところが長年堂内に放置されたままであったため、全体的に埃塵に覆われるとともに、脚部等の破損が激しく天板・側板・脚部は分割された状態であった。また、本資料を特徴つける中国風もしくは琉球風の模様が入った漆塗膜層や螺鈿貝の剥落などの劣化も著しいため、早急の保存措置が必要であった。 そこで平成 25 年度から 26 年度の 2 ヶ年の継続事業として、1. 本対象資料である螺鈿机の性格を把握するための基礎的な調査（螺鈿模様の復元図作成、塗装材料及び技法・構造の分析調査など）、2. 塗装面の保存修復作業、3. 破損や欠損が著しい脚部の復元、などの一連の作業を行うこととなった。このうちの本年は、主に 1. に関係する観察・分析調査と、それに伴うクリーニング作業及び劣化が著しい箇所での養生作業を実施した。 概要 ◇調査対象 1 点 ◇調査概要 (1) 搬入及び低酸素燻蒸作業：搬入された対象資料は、得仁堂内で長年放置されていたため、虫害痕跡が目視確認された。そのため、当研究所搬入時に脱酸素剤と専用袋を用いた燻蒸作業を約 3 ヶ月実施した。 (2) 調査前の写真撮影：燻蒸作業が終了した対象資料を写場に移動し、高精細デジタル写真撮影を実施した。 (3) クリーニング及び脆弱膜面の養生作業：対象資料表面には埃塵が多く覆っているため、以後の調査を実施する際の移動時に脆弱箇所から漆塗料及び螺鈿貝の小剥落片が出ないように、和紙としょうぶ糊による養生作業と、試料表面に堆積した埃塵を刷毛・筆、ミュージアムクリーナー等を用いて簡易クリーニングを実施した。 (4) 塗装材料及び技法に関する分析調査：剥落小塗膜試料を採取し、塗装断面の顕微鏡観察、漆塗料の PY-GC/MS 分析等を実施した。 (5) 螺鈿模様や復元図作成：先に撮影した高精細デジタル写真画像と目視観察により、対象資料の螺鈿模様の復元図を作成し、現状で残存している箇所と復元箇所の比較が可能なように色分けした線描の図面を作成した。 ◇効果と課題 今年度の調査では、螺鈿机の材質・技法の分析や劣化状態の確認、螺鈿模様の復元図作成等を行うとともに、第 1 段階のクリーニング作業を実施した。その結果、本資料の現状把握を詳細に行うことができた。来年度は、剥落止め、漆固め、破損が著しい脚部の復元等の施工実験を行う予定である。従来の漆塗料の身を使用する漆工品の修理作業とは異なり、膠材料や合成樹脂の応用、加温コテを使用した膜面の変形修正などの作業も施工実験では取り組む計画にしている。			
 螺鈿机の天板			
【実績値】 受託事業報告書 1 件： 『小石川後楽園得仁堂収蔵物の保存修復科学的調査報告 2013 年度』、東京文化財研究所、2014. 3. 20 (内容：対象資料である小石川後楽園得仁堂内収蔵物（螺鈿机）の材質・技法・構造に関する調査報告書 (本事業は東京都〔東京都東部公園緑地事務所〕からの委託			
【受託経費】 600 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 8067

業務実績書(受託事業)

研No.93-1

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	鳥取県鳥取市良田平田遺跡他2遺跡出土文字資料の保存処理等の総合的研究(受託)((1)-(2))		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 山本 崇(都城発掘調査部主任研究員)、渡辺晃宏(史料研究室長)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、馬場基(都城発掘調査部主任研究員)、桑田訓也(史料研究室研究員)、山本祥隆(史料研究室研究員)、高妻洋成(保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎(保存修復科学研究室研究員)、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)、藤井裕之(客員研究員)、中村一郎(写真室主任)、松井 潔((公財)鳥取県教育文化財団調査室長)、高尾浩司((公財)鳥取県教育文化財団文化財主事)			
【年度実績概要】 - 鳥取市良田平田遺跡・良田中道遺跡・東桂見遺跡から出土した木簡及び、良田平田遺跡から出土した墨書土器について、最新の機器を用いた解読によりその歴史的な評価を確定し、また貴重な資料群を後世に残すために木簡の状態に即した最適の手法による科学的な保存処理を行うものである。木簡9点、墨書土器49点を対象とした。 - 本年度に実施した事業は、下記の通りである。 - 水漬け状態にある木簡について、現物の熟覧のほか、赤外線テレビカメラ装置と赤外線デジタル写真を用いて検討を加え、現状の釈文案を作成した。加えて、実体顕微鏡による樹種の観察を行った。 - 上記の作業完了後、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室において、科学的な保存処理を実施した。保存処理は、木簡の状態に応じて個別に検討を加え、高級アルコール法を採用した。 - 保存処理後の状態を記録し、再釈読に供するため、カラー・赤外線デジタル撮影を行った。作成した画像は、奈文研と(公財)鳥取県教育文化振興財団の双方に保管している。 - 保存処理後、(1)と同じ要領で再度釈読検討会を実施し、9点の木簡の釈文を確定した。 - 墨書土器の熟覧調査を行い、釈文を確定した。 - 以上の調査の結果、保存処理により墨痕が鮮明になるものも多く、従来の釈読に加えて、さらに読みを進めることができた。とりわけ、現在のところ中国地方最古となる文書木簡の解読が進んだ点は特筆される。成果の一部は、高尾浩司「鳥取県鳥取市良田平田遺跡出土木簡」(『考古学ジャーナル』646号、2013年)、高尾浩司「鳥取・良田平田遺跡」(『木簡研究』35号、2013年)に示したほか、保存処理後の成果を含む最新の釈文を、山本崇・高尾浩司「鳥取県良田平田遺跡の出土文字資料」(『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6予定)として公表する予定である。			
			
良田平田遺跡出土の前白木簡(保存処理後・赤外画像)			
【実績値】 解読木簡点数9点、解読墨書土器点数49点、木簡の保存処理点数9点、デジタル写真74枚、赤外線画像142点			
【受託経費】 195千円			